

定校

今鏡

一名  
續世繼

下

三

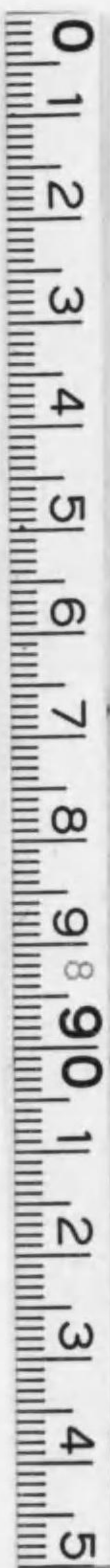
913.42-143



1200500757396

1342

1.43



始



岡

J 13

28

Q13.42  
I.43

定校 今鏡讀本下卷目錄

うたゝね

◎第七 むらかみの源氏

夢の通ひ路

堀河の流れ

有栖川

根あはせ

たみまくら

むさしのゝ草

ほの烟り

◎第八 みこたち

源氏のみやすどころ

ふしゝば

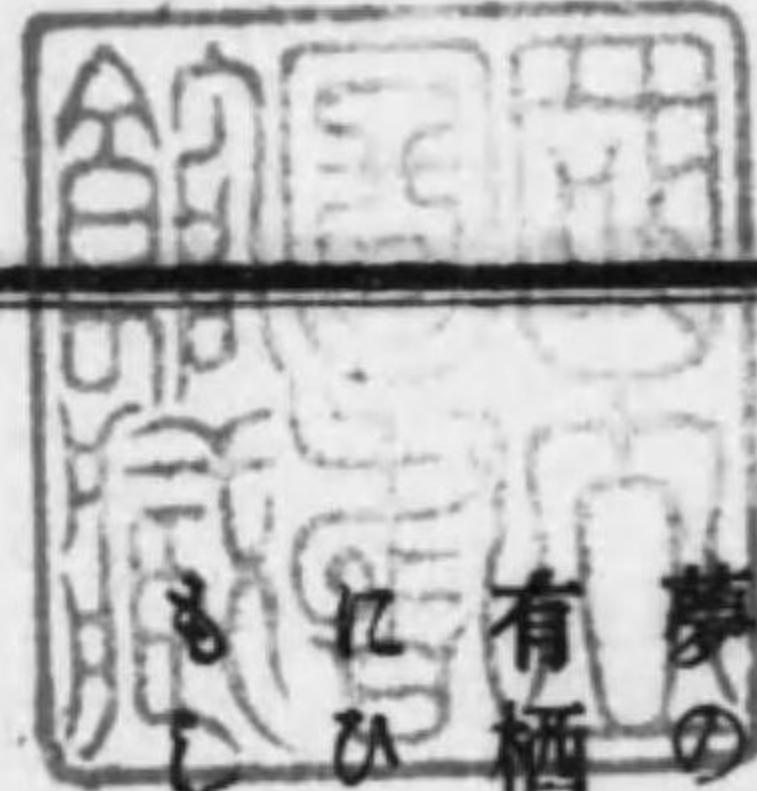
はらぐゝのみこ

◎第九 むかしがたり

あしたづうす紙とも

祈る志るし

花のある源氏大将とも  
月のかくるゝ山のは



校今鏡讀本下卷

目錄



からうた

まことの道

かじこきみちく

◎第十 うちぎ

敷島のうちぎ

奈良の御世

作り物語のゆくへ



校定 今鏡讀本 下



◎第七

(五九) うたゝね

此の段より村上天皇の御末の傳なりされば目録の首に村上の源氏とあり

藤波の御流れの、榮え給ふのみにあらず、みかど一の人の御母方には、近くは源氏の君たちこそ、よき上達部どもは、ははすなれ。堀河のみかどの御母、賢子の中宮は、京極殿師實これほどの、御子とて、参り給へれど、誠は六條の右のおとゞの御女なり。きささきの御事はみかどのついでに申し侍りぬ。そのゆかりのあり様、源をたづぬれば、いとやんごとなくなん侍る。村上のみかどの御子に、中務のみこと日本申し、は、六條の宮とも後、中書王とも申す、この御事なり。ふみ作らせ給ふこと、世にすぐれ給へりき。御歌も世々の集どもに見え侍らん。その御子に、土御門の右のおとゞと申し、は、始めて、源の姓得させ給ひて、師房のれとゞと聞こえさせ給ひき。御身のさえも

此の歌金葉集にあり

高く、文作らせたまふ方もすぐれ給ひて、野のみかりの歌の序など、人の口に侍るなり。又月の歌こそ、心に志みて聞こえ侍りしか。

有明の月まつ程のうたゝねは、山のはのみぞ夢に見えける。

すきぐしき方のみにあらず、土御門の御日記とて、世の中の鑑となんうけ給はる。みかど一の人の御よそひども、その中にぞ多く侍るなる。御堂の御女は、おほくきさき、國母にてのみれはしますに、此の殿の北のかたのみこそ、たゞ人はれはしませば、いとくやんごとなし。その御はらに、堀河の左のれとゞ俊房、六條の右のおとゞ顯房と申して、兄れとうと並びたまへりき。堀河殿は、才學高くおはして、文作りたまふと、すぐれて聞こえ給ひき。六條殿は、歌よみにぞれはして、判などし給ひき。世のおぼえ兄よりもまさり給ひて、大納言の大將、中宮のれほんれやにておはせしに、大臣あきて侍りけるを、白河のみかど、れぼしわづらはせ給ひて、日頃過ぎけるに、匡房の中納言に、仰せられ合はせければ、「堀河の大納言をなさせ給へ。」とうちいだして申しければ、みかど仰せられけるは、「弟となれども、左大將中宮の御おやにて、此のたびならずは、法師にならんといふなり。また上臈ども有りて、

中宮は白河院の中宮なり。白河院の御女とて入内なれども、誠は顯房の御女なり。

太政のれとゞは雅實とて顯房の嫡子なり

われこそなるべけれ。などいふは、それも捨てがたきなり。」と仰せられければ、「大納言大臣になり侍るとは、かならずしも、一二といふと侍らすなるべき人をえりて、なされ侍るなり。又國の司歴たる人いかゞ」など申し侍りければ、菅原のれとゞも讚岐守ぞかし。」と仰せられければ、江師申しけるは、「博士はべちのことに侍り。又才學高く侍らん兄を、大臣になさせ給はんに、出家するおとうとはよに侍らし。」と申しければ、堀河殿はなり給へりけるとぞ。六條のれとゞは、その後れぞなり給ひし。中宮の御おや、堀河のみかどの御おほちにて、いとめでたくおはしき。後には大將をば、太政のれとゞの大納言におはせしに、譲り申し給ひて、行幸に仕うまつり給へりしこそ、いとめづらかに侍りしか。遅く参り給ひて、道にて車よりおりて、馬にのり給ひしかば、大將殿よりはじめて、皆おり給へりしに、盛重といひしが、左衛門尉なりしと、行利といふ隨身の陣につかうまつりしを、あがり馬にのせて、さきに具せさせたまへりければ、なほ大將にてわたり給ふとぞ見えける。このあにおとうのおほいどの、少將におはしける時、隆俊治部卿御むこにどり申さんと思ひて、うの時目しひたる相人ありけるに、「彼の二人いかゞ相したてまつりたる。」

と問はれければ、「ともに能くればします。皆大臣にいたり給ふべき人なり。」といひけるを、「いづれか世にはあひ給ふべき。」と問はれけるに、「れどうとは、末廣く、みかど一の人も、出でき給ふべき相おはず。」と申しければ、六條殿をとり申したるどぞき、侍りし。其のかひありて、みかど關白も、その御末より出でき給へり。雪ふりのみゆきにおそく参り給ひて、「雪見んとしもいそがれぬかな。」とよみたまへること、いとやさしく、昔の心ちし侍れ。よる女の許にわたり給へりけるに、かねてもなくて、門に車の絶えずたちければ、それを召して出でたまひければ、盛重といひしが、出でさせたまふ道に、常はふしたりければ、かならずれ奉つるとなかりけるに、お中さふらひと、盛重とふたりどもに具して、出でたまひけるに、馬に乗れりける者の、おりざりければ、お中人、どもしたるついで松して、うちおとさんとしけるを、猛きもの、ふども、多く具したりけるが、御車によらんとしけるを、盛重御車のもとにて、「皇后宮、大夫殿のおはしますぞ。過ち仕うまつるな。」といひければ、まどひおりて、「皆々まかりのきね。」武者云といひければ、過ぎ給ひにけり。次の日の夕暮に、頼治といひし武者の、れほいどのへ参りて、御門の方にて、盛重たづね出だして

此の段は堀河左大臣侍房公の御子たち傳なり

「よべかしく御恩かぶりて、過ちを仕うまつるらん」とて、かこまり申しに参りたる也。かくとはな申したまひそ。といひけれど、れほ殿に申したりければ、召してみきす、めなどしたまひけるとぞ。盛重が子盛道といひしは語りける。

(六十) 堀河の流れ

堀河の左のおとこの御子は、太郎にては師頼大納言とておはせし、御母中將實基の君の御むすめなり。文など博く習ひ給ひて、さえはする人にておはしき。中辨より宰相になり給ひて、ひら宰相にて、前の右兵衛督とて、年久しくおはしき。年よりてぞ、中納言大納言などに引續きて、程なくなり給ひし。近衛のみかど、東宮にたゝせ給ひしかば、母きさきの御ゆかりにて、大夫になり給へりき。歌をぞ口疾くよみ給ひける。早くけさうし給ふ女の、百首よみ給ひたらば、逢はんといふありけるに、題をうちより出だしたりけるに從ひて、よひより曉になるほどに、よみはて給ひたりけるに、女かくれにけるぞ、いとくちをしかりける。周防内侍がゆかりなりければ、内侍のとがにぞ聞く人申しける。大納言の御子は師能の辨とて、若狭守通宗のむすめのはらにおはしき。その兄弟に、師教師光などきこえ給ふ、三井寺に

證禪已講とて、よき智者おはしける、うせ給ひにけり。師光は小野宮の大納言能實のうまごにて、小野宮の侍従など申すにや。大納言師頼の女の御弟も、師時の中納言と申し、その母侍従宰相基平のむすめなり。それも詩などよく作り給ふなるべし。大藏卿匡房と申し、博士の申されけるは、この君は、詩の心得てよく作り給ふとぞ、ほめきこえける。からの文ものし給へるとは、兄師頼には劣り給へりけれど、日記など量りなく、かきつめ給ひて、此の世にさばかり多く記せる人なくぞ侍るなる。その文どもは、うせ給ひてのち、鳥羽院めして、鳥羽の北殿にれかせ給へりけるに、權大夫とかきつけられたる櫃ども、數しらずぞ侍りける。宗茂菅軒などいひし外學がくさうの、上官なりし時は、此の君弟子にれはして、車など貸したまへりければ、記の車は、上臈次第にこそたつなるを、中將殿の車とて、牛飼一つに立て、争ひなとしける、歌よみにもれはして、兄の大納言師頼も、この君も、堀河院の百首などよみ給へり。爲隆宰相は、大辨にて中納言にならんとしけるにも、宰相中將なれども、大辨に劣らず、何事もつかへ、除目の執筆などもすれば、うれへとゞめなどし給ひける。大方の物の上手にて、鳥羽の御堂の池堀り、山造りなど、とりもちてさたし給

ふとぞ聞こえ侍りし。ゆゝしくうへをぞ多くもち給へると、うけたまはりし、六七人と持ち給へりけるを、夜毎に皆おはしわたしけるとかや。冬は炭などをもちせて、火おこしたる、消えがたには出でつゝ、よもすがらありきたまひて、朝いを午時などまでせられけるとぞ。さて其のうへども、皆中よくて、いひかはしつゝ、ぞおはしける。この中納言の御子は、中宮大夫師忠のむすめのはらに、師仲中納言とておはする、右衛門督信賴のいくさおこしたりし折、あづまに流され給ひて、歸りのぼりておはするとぞ。この兄ども、少納言大藏卿などきこゆる、あまたれはしき。おほいどの、御子は、入道中納言師俊とておはしき。大辨の宰相より中納言になりて、治部卿など申し、程に、御病によりて、かしらおろし給ひて、たうのもの入道中納言とぞきこえ給ひし。それも物よく習ひ給ひて、詩などよく作り給ふ。歌よみにもおはしき。この兄れどうとたち、かやうにれはする、理りと申しながら、いとありがたくなん。延喜天曆二代のみかど、かしてき御世にれはします上に、ふみ作らせ給ふ方も、たへにおはしますに、中務の宮、又すぐれ給へりけり。土御門殿師房、堀河殿俊房、あひつぎて、御身のさえ、文作らせ給ふ方も、すぐれ給へるに、土御門殿は、才すぐれ

堀河殿は、ふみ作り給ふこと、すぐれてればすとぞきこえ給ひける。この大納言師中納言たち、かく仕へ給ひて、六代かくおはする、いと有りがたくやんごとなし。この大納言中納言殿たちの詩も歌も、集どもに多く侍らん。中納言の御子師は、少納言になり給へりし、後は大宮亮とぞきこえける。そのおとうとは、寛勝僧都とて、山におはしけるこそ、あめつちといふ女房の、みめよきが生みきこえたりければにや。みめもいときよらに、心ばへもいときつきくしき學生にて、山の探題などいふともまたまひけるに、あるべかしくいはまほしきさまに、いとめでたくこそおはしけれ。説法よくし給ひけるに、人にすぐれても聞こえ給はざりしかど、ある所にて、阿彌陀佛釋し給ひしこそ、法文のかぎりし給へば、聞きまらぬ人は、何とも思ふまじきを、男も、女も、身にまみてたふとがり申して、聞きまらぬは、かばかりのとなしと思ひあへり。天台大師の經を釋し給ふ、四の法文にて、はじめ、如是より、經のすゑまで、句ごとく釋し給へば、その流れを汲まん人、法をとかん其のあどを思ふべければとて、はじめには因縁などいひて、さまざまの阿彌陀佛をときて、むかし物がたり説き具しつゝ、何事も我が心より外のともものやはある。

事の心をまらぬは、いとかひなし。朝夕によその實をかぞふるになんあるべき。など説き給ひし、思ひかけず、うけたまはりしこそ、世々の罪も滅びぬらんかしとおぼえ侍しか。

(六一) 夢の通ひ路

堀河殿使の公達、大臣に成り給はぬぞくちをしき。春宮大夫師は、一の大納言にて時にあひ給へりしに、成り給ふべかりしに、折ふし、あきあふ事なく、えならでうせ給ひにき。若くおはしける時に、御夢に採桑老といふ舞を志給ふとみて、語り給へりけるを、物に心得ぬ人の、宰相にて久しくやおはしまさんすらむと、合はせたりける。いとあさまし。さいさうといふことは有りとても、さい相とやは心得べき。桑といふ木をとるおきなどいふ心とも、其の木をとりて、老いたりとも云ふにつきてぞ心うべきを、かゝるひがとのある也。されば大納言はらだちて、のたまひければにやありけん。さいひける人も、とくうせにけり。又大納言殿も、誠に宰相にて久しくおはしき。昔九條の右のおと師の御夢を、あしく合はせたりけんやうなること也。宰相にて久しくおはせざらましかば、大臣にはなり給ひなまし。又おほい殿使の

此の段も前のつゞきにて後房公の息師頼卿の傳なり

いつきを取り据ゑ給へりしかばにや。御末のつかさ昇りがたくおはする。」と申す人もあるとかや。九條殿の北の方の宮も、びんなきとなれど、それはたゞ宮ばかりにおはしき。これはいつきに居たまへる人を、籠めすゑ申したまへりし、類ひなくや。業平の中將も、「夢かうつゝかの事にてやみにけり。道雅の三位も、「ゆふしでかけしいにしへに」などいひて、志のびたるとにこそ侍りけれ。これはぬすみ出だして、とりすゑ給へれど、業平の中將にはかはりて、前のなれば、さまであやまりならずやあらん。齋宮の女御なども、又いつきのたりに給ひて、きさきになり給へるもおはせずやはある。又大臣まで、ぬしのぼり給ひしかば、末のかたかるべきにあらす。おのづからの事なるべし。堀河殿は、僧子も多くおはしき。小野法印、山の座主彼國など聞てえ給ひき。姫君は、富家の入道忠實とゞの北の方にておはせし、後には、御堂の御前などきこえて、御ぐしれろし給へりき。おとうどの姫君は、子にし給ひて、御堂をも譲り給へるは、堀河の大納言師頼の子の辨辨能に具し給へりけるとかや。それもさまかへておはするとぞ。又近衛のみかどの御は、女院も、左のおとゞの御むすめの生みたてまつり給へると聞てえ給ひき。この堀河殿は、七十になり給ふ御とし、御子

の堀河の大納言師頼殿の、右兵衛督と申し、父のおとゞの御賀せさせ給ふとて、長治元年志はすの廿日あまり、堀河殿にて、御賀したてまつり給ふとき、侍りしこそ、むかしのと聞き侍るやうにたほえ侍りしか。その殿にまおりし、僧のかたり侍りしは、瑠璃のみくいの佛の、人のたけにおはします、かき奉りてこそ、彼の岸のみに、かねの文字に七卷、たゞの文字の御經な、そち、寫したてまつりて、僧綱有職など七人、請せさせ給ひて、供養したてまつらせ給ふ。一家の上達部殿上人、太政のおほいどの、内大臣と申し、より始めてわたり給ひて、御佛供養の後、舞人樂人など、左右の舞ひなどして、後には御あそびせさせ給ふ。御みき聞てえかはしなどして、いひまらずめでたく聞きたまへりしが、中院の大將雅定若君にればしける、十八ばかりにて、笙の笛吹き給ひけるこそ、その日のめづらしく、涙もおとしつべきとに侍りけれ。このおとゞよりは、六條大臣殿は、さきにうせ給ひにしかば、その御子の太政のおとゞ雅定は、堀河のおとゞ俊房に、何事も尋ね習ひ給ひて、親子の如くなんおはしける。それにひかれて、こときんだち皆靡き申し給ひけりとぞき、侍りし。

(六一) 根あはせ

此の段は六條右大臣藤原公の子たちの傳なり



賢子御房の御女な  
りしを白内侍  
女として入内せし  
をり上にあり

この歌金葉集にあ  
り

六條の右のおとゞの公達は、まづ堀河のみかどの御母中宮賢子、その御はらに、前坊と、堀河のみかどと、をのこ宮生みたてまつり給へり。女宮は、媞子の内親王と申すは、白河院の第一の御むすめ、伊勢のいつきにればしまし、中宮うせさせ給ひにしかば、出でさせ給ひて、堀河のみかどの姉にて、御母さきになぞらへて、皇后宮に立たせ給ふ。院號ありて郁芳門院と申しき。寛治七年五月五日、あやめの根合せさせ給ひて、歌合の題、苜蒲、郭公、五月雨、祝、戀なん侍りける。こまかには、歌合の日記などに侍るらん。判者は六條のおほい殿顯房させ給へり。周防内侍、戀の歌、

こひわびて、ながむるそらのうき雲や、我が下もえの煙なるらん。

とよめりけるを、判者あはれ仕うまつりたる歌かな。と侍りければ、右歌人かちぬとて、このうた詠じてたちにけるとなん。二位大納言顯實の宰相におはせしにかはりて、孝善が「ひくてもたゆくながき根の」とよみとゞめ侍るぞかし。永長元年八月七日、かくれさせ給ひにき。その年、おほ田樂とて、都にも、道もさりあへず、神の社々、この事ひまなかりける、御事あるべくてなど、世に申しける。この御とを、白河院なげかせ給ふともおろかなり。これによりて、御ぐしれろさせたまへり。

この歌金葉集九  
下に載す第一の句  
うかりしにとあり

あさましなど申すもれろかなり。御めのと子の、まだ若くて、廿一とか聞こえしも、法師になり侍りし。かなしさは理りと申しながらも、わかきそらにいとあはれに、ありがたき心なるべし。日野といふところに、すむとぞき、侍りし。女のとしの秋、むかしの御事思ひ出で、そのとものぶの大とこ

かなしさは秋つきぬと思ひしを、ことしも虫のねこそなかるれ。

とよみて、筑前の御とて、伯の母ときこえしがもとに、つかはしたりければ、筑前かへし、

虫のねはこの秋志もぞなきまさる。別れの遠くなる心ちして、

と侍りしを、金葉集には、き、あやまりたるにや。かきたがへられてぞ侍るなる。六條院に御堂たてさせ給ひて、昔おはしまし、やうに、女房さぶらひなど、かはらぬさまに、いまだおかれ侍るめり。御かなしみ、むかしもたぐひあれど、かゝると侍らす。御庄御封など、よにおはします様に、志おかせ給へれば、すゑぐのみかどの御時にも、改めさせ給ふとなくて、この比も、さきの齋宮、傳へておはしますとぞ、きこえさせ給ふめる。

此の段は藤原公の  
御女中宮および御  
外孫の御宮たちの  
傳なり

(六三) ありす川

この中宮皇子の姫宮、二條の大宮とて、女院御方門院の御れとうとおはしまし、令子内親王とて、齋院になり給ひて、後には鳥羽院の御母とて、皇后宮より給ひて、大宮にあらせ給ひにき。いと心よくき宮のうちと聞き侍りしは、侍従大納言成通、三條のおとどなど、まだ下臈におはせし時、月のあかりける夜、さまやつして、宮ばらを、まのびて、立ち聞きたまひけるに、あるは皆ねいりなどしたるも有りけり。この宮にいらたまひければ、西の對の方、まづまりたるけしきにて、人々皆ねたるにやと、おぼしかりけるに、奥の方に、わざとはなくて、箏のとの、つまならしめて、絶えなくきこえけり。いとやさしく聞こえけるに、北の方のつまなる局、妻戸たてたりければ、月も見ぬにやとおぼしけるに、うちに源氏よみて、櫛こそいみじけれ。葵は志かありなどきこえけり。臺盤所の方には、さざれ石まきて、らんごひろふ音などきこえけるをぞ、昔の宮ばらも、かくやありけん侍りける。また古き歌よみ、攝津の御といふ、又六條とて、若きうたよみなどありて、折ふしにつけて、心にくきむたち、多く侍りけり。爲忠といひしが子の、爲業といひしにや。いづれにかありけん。かの

宮による参りて、御たちとあそびけるに、爲忠國にまかりける程なりけるに、年老いたる聲にて、八橋と、天の橋立と、いづれまさりて覺えさせ給ひし。」とたよりに傳へ給へ。などいひけるを、後に、又あるむたち、「かくとつてし給ふ人をば、誰れとかまじりたまひたる。」といひければ、「やつはし、あまのはしたてなど侍りけるに、心に侍りぬ。」といひけるを、次の日、「よべ心えたりといはれしこそ、猶そのひとの如くおぼゆるなどいひけるをき、津の御とりもあへず、心えずのことや。八橋などいはんからに、われとや心うべき。ながらの橋といはこそ、われとは志らめ。」といひけるも、をかしく、又土御門の齋院と申して、種子内親王と申しておはしき。その齋院は、常に法の筵などひらかせ給ひて、法文のとなど、僧参りあひて、たふとき事ども侍りけり。雅兼入道中納言などまわりつゝ、もてなしきこえ給ひけるとかや。歌なども。人々まわりてよむ折も侍りけり。水のうへの花といふ題を、時の歌よみども、参りてよみけるに、女房の歌、とりぐにをかしかりければ、木工頭俊頼も、むしろにつらなりて、「このうたは、圍碁ならばかたみせんにてぞよく侍らん。」など、とりぐに褒められけるとぞ。其のひとり、堀河君とて、顯仲伯のむすめの

おはせしうた、

雪どちる花のまたゆく山水の、さえぬや春の志るしなるらん。

また

春風にきしの櫻の散るまゝに、いとゞ咲きうふ浪の花かな。

この外もきゝ侍りしかど、忘れにけり。入道治部卿の雅兼一嵐や峯をわたるらん。とよみ給ふ、そのたびの歌なり。白河院歌どもめしよせて、御覽じなどせさせ給ひけり。一院の御むすめなればにや。殊の外に、あるべかしくぞ、宮のうち侍りける。女房中藹よなりぬれば、みづから、さぶらひに物いひなどはせさりけりとぞきこえ侍りし。この齋院かくれさせ給ひてのち、そのあとに、堀河の齋院善子内親王つきて、すみ給ひけるころ、むかしおぼしいで、中院の入道おとゞよみ給ひける、

ありすがは同じ流れと思へども、昔のかけの見えばこそあらめ。

(六四) 紫のゆかり

中宮の御せうとたち、男も僧もさまぐおほくおはしましき。太政大臣雅實のおとゞと申し、は、中宮の一つ御はらからにて、六條の右のれとゞの太郎におはし

此歌新古今に在り  
此の段は願房公の  
子息中宮の御兄雅  
實公の傳なり

き。その御母治部卿隆俊の中納言のむすめなり。久我のおほきおとゞと申しき。いと御身のさえなどは、おはせさりしかど、世に重く、思はれたる人におはせし。父おとゞ、わがまゝなる御心にて、ひがくしきことも、志たまひけるにも、このおとゞ参り給ひければ、とゞまりたまひけり。白河院も、耻ぢさせ給へりけるとこそ聞こえ侍りしか。醍醐より、僧正の申さるゝことなど侍りけるを、此のおとゞに、仰せられ合はせければ、詞知る所など幾ばくも侍らねば、さぶらふ者どもに申しつけて、志もづかさなどいふとは、え知り給はぬとになん。など侍りければ、いと耻院かしくあるかな。と仰せられけり。堀河のみかどの御時、子の少將とて、入道右のおとゞ、石清水の舞人し給ふべかりけるに、中のみかどの内のおとゞ、少將とておはするは、上藹なりけれど、一の舞は、中院を仰せられんずらんと、おぼしけるに、知足院忠實の大殿の關白におはするに、みかども憚りて、宗能の一の舞し給へりければ、久我のおとゞ聞きつけ給ひて、この少將をば呼びとゞめて、腹だちてこもり給ひければ、みかどもいたませ給ひて、心ゆるさむとて、加階を給はせたりければ、然あらば、出でありかさらんも便なしとて、喜び申しなどせられけるに、關白どの

四條の宮は後冷泉院の中宮にて御名御女子字治頼通公の御女におはす

中宮は待賢門院を申す

對面去たまひて、「このついでなれば申すぞ。大饗には、おとゞ尊者に申さむするなり。其の由きこえたるべきなり。」などありて、頼みておはしける程に、その日になりて、見せに遣はしたりければ、御物忌にて、門さしておはしければ、俊明の大納言を、尊者には呼び給ひける。四條の宮は、むけに下りたる世かな。とて、泣かせ給ひけるとかや。臨時の祭の一の舞、雅定少將のし給はぬ、やすからぬ心にて、かくたがへ給ふなりけり。その入道右のおとゞ、雅定宰相の中將と申し、時、實能のおとゞの、三位中將とておはせし、こえて中納言になり給ひけるにも、太政のおとゞ、院をうらみ申し給ふと聞かせ給ひて、「中宮のせうとにて、うちのせさせ給ふ。すちなきとかな。」と仰せられながら、長忠の宰相、左大辨にて中納言になりたりけるを、子を辨になさんと申しけるものを、「とて、中納言よて七八日ばかりやありけん。長忠をば、大藏卿になして、子の能忠をは辨になしてぞ、中院の宰相中將は、中納言になり給ふとうけ給はりし。待賢門院中宮にたゞせ給ひけるにや。白河院、盛重とてありしを御使にて、太政のおとゞに、「何事も、思ふ事のかなはぬはなきに、上臈女房なん、心にかなはぬとはあるを、思ひかけず、上臈女房をまうけたるとなん侍る。」と、

仰せられたりければ、いかなる人にとにかと問ひ給ふに、外腹の姫君のおはしける御事なりけり。それを聞き給ひて、御後見呼びて、「その姫君のもとへ、さたしやる事どもは怠たらぬか。」と問ひ給へば、更に怠り侍らず。と申すに、「今はそのさたあるまじ。とありければ、御使も後見も、いと思はずに思へりけり。」御かへりいかゞ、「と申しければ、雅定うけ給はりぬ。」とばかり申し給ひけり。院はともかくもの給はざりけりとなん。かやうに院にも關白にも憚り給はぬ人になはしけり。御心のあてなるあまりに、物の數も、こまかに知り給はざりけるにや。納殿するさぶらひ人のもとに、きぬせさせにやれとありければ、「二つが料には、ふた匹なん遣しつる。」と申しければ、「一つをこそ、二匹にてはすれ。」とのたまひて、驚き給ひけるに、内匠のすけなにがしといふに、問ひ給ひければ、同じさまに申しけるにこそ、「さはえ知らざりけるにこそ。」と、折れ給ひけれ。これをいへ人、語りあひけるをきよて、兼延といふ近衛舍人は、「いづれの國のきぬとかを、こまかにきりなどさせ給ふ所もおはしますものを、」などいひける、いと耻かしくこそ。このおほい雅定まうちぎみ、おこりて、ちわづらひ給ひけるに、白河院より平等院の僧正をつかはして、祈らせ

給ひけるに、おこたりたる布施に馬をひき給ひける、大方いひしらぬ悪馬になむ侍りければ、院きこしめして、われこそ布施も得べけれど、盛重といひしを遣はして仰せられければ、院にありがたきもの参らせんとて、武藏の大徳隆頼がつくりたる、小弓のゆづかの、しもひとひねりしたるを取りいで、漆のきらめきたるさして、すりまはして、錦のゆづかどりすて、みちのくに紙してひき巻きて、錦の袋にも入れず、唯みちのくに紙につゝみて、たてまつられたりければ、いと珍らしきものなりと、たちかへり仰せられけるとぞき、侍りし。

此の段は雅賢大臣の子たちの傳なり

(六五) にひまくら

このおとゞの御子は、大納言顯通と申して、父おとゞよりもさきにうせ給ひにき。其の御子は、今の内大臣雅通の大將と申すなるべし。此の大將の御母は、よしとしの治部卿のむすめにやおはすらん。又此の御兄に、つのかみ廣綱のむすめのはらに、山の座主明雲權僧正とて、いまにおはすなるこそ、世の末には、かやうなる天台座主はおはしがたくうけ給はれ。我が道の法文をも、深く學び給ふ。かたぐ世にたふとくて、御心ばへも重くおはするにや。山のうへこそぞりて、もちお奉りたると

かや。うちつゞきたもつ人、ありがたくきこえ給ふに、大衆など鐘ならして、起こる事だに侍らぬとかや。又太政のおとゞの御子にては、右大臣雅定と申して、さきにも舞人のと申し侍る。中院のおとゞとておはしき。御母は加賀兵衛とかいひしが、いもうとにて、下らう女房におはせしかど、兄の大納言顯通よりも、おぼえもおはしもてなし申し給ひき。此のおとゞは、さえもおはして、公事なども能くつかへ給ひけり。笙の笛などすぐれ給へりける、時元とて侍りしを、少しもたかへず、うつし給へるとぞ。まじりまるといふ笛をも、傳へ給へり。まじりまるとは、からの竹、やまどの竹の中に、すぐれたるねなるを、撰ひ作りたるとなん。まじりまるといふ笙の笛は、二つぞ侍るなる。時元が兄にて、時忠といひしも作り傳へ侍るなり。むらといひて、稻荷祭などいふ祭わたるもの、吹きてわたりける笛の、響き殊なる竹のまじりて、きこえ侍りければ、棧敷にて、時忠よびよせて、「かゝるはれには、同じくは、かやうの笛をこそ吹かめ。」とて、我が笛にとりかへて、「我れをば見知りたるらん。後にとりかへん。」といひければ、むらのをのこ喜びて、「皆見知り奉れり。」とて、とりかへたりけるを、すぐれたる響きありける竹をぬきかへて、えならず調べたて、

たびたりければ、喜びてかへしえてなん侍りける。そのまじりまろは、時忠が子の時秀といひしが傳へ侍りしを、子も侍らざりしかば、此の比は誰れか傳へ侍らん。時忠は刑部丞義光といひし源氏のむさの、好み侍りしに教へて、その笛を元よりとりこめて侍りけるほどに、義光あづまの方へまかりけるに、時忠もいかでか、年ごろのほいに送り申さざらん。とて、はるぐと行きけるを、この笛の事を思ふにやと心得けん。我が身はいかでも有りなん。道の人にて、この笛をいかでか傳へざらんとて、返したびたりければ、それよりこそ、暇請ひてかへりのほりにけれ。其の笛をかくたしなみたれども、時元若かりける時、武能といひて、えならず笛調ぶる道のものありけるが、年たけて、よる道たどぐしきに、時元手をひきつゝ、まかりければ、いどうれしく思ひてえならず調ぶるやうども傳へて侍りければにや。いと殊なるねある笛になん侍るなる。この右のおど雅定、かゝる傳へればするのみにあらず、家の事にて胡飲酒まひ給ふと、いみじく、其の道得給ひて、心殊におはしける、其の舞も、資忠とてありし舞人の、政連といひしと挑みて、祇園の會に、はやしの日とか。殺されにければ、忠方近方などいひしも、まだいといはけなくて、

習ひも傳へば、太政のおどの、忠方には教へ給へるぞかし。然あれども、このおほいどのばかりは、得傳へざるべし。政連は出雲に流されて、彼の國の司のくだりたるにも教へ、又子の友貞とかいふも、京へのぼりて、顯仲とかいひし中納言にも、教へなどすと聞きしかども、此のれほいどの、傳へ給へるばかりは、いかでか侍らん。兄の忠方は、胡飲酒をつたへ、弟の近方は、採桑老を天王寺の公貞といひしに傳へて、此の比は、その子どもの、兄弟、筋別れて舞ひ侍るとなん。忠方近忠、落躰といふ舞し侍りしは、おどうとは、兄のかたを踏まぬさまに舞ひ侍りしは、めづらしき事に侍りしを、子どもはいかゝ侍らん。ゆかしく。この右のおど雅定は、御心ばへなどすなほにて、いどうある人にておはしける上に、後の世の事など、たばしどりたる心にや。わづらはしきともれはせで、いとをかしき人にぞれはせし。まだ若くおはせし比にや。伊豫の御といふ女を、かたらひ給ひけるに、物の給ひ絶えて、ほど經ぬほどに、山城の前の司たる人になれぬとき、て、やり給へりける御歌こそ、いどうありて、をかしくき、侍りしか。

誠にやみとせもまたで山城の、伏見の里よにひ枕する。

此の歌千載集にあり

と侍りける。むかし物語見る心ちして、いとやさしくこそうけ給はりしか。おほかた歌よみにおはしき。殿上人にればせし時、石清水の臨時の祭の使、またまへりけるに、その宮にて、御神樂など果て、まかりいで給ひける程に、松のこすゑに郭公のなきけるを聞きたまひて、俊頼の君の、陪從にておはしけるに、「むくのかうの殿、これはき、給ふや。と侍りければ、思ひかけぬ春なけばこそはべめれ」と心とく答へ給ひけるこそ、いとしもなき歌よみ給ひたらむには、遙に優りて聞てえける。四條中納言、この料によみおき給ひけるにやとさへおぼえて、又き、給ひてれどろかし給ふも、いうにこそ侍りけれ。かやうにおはせん人、いとありがたく侍り。出家などし給ひしこそ、いと清げに、めでたくうけ給はりしか。べちの御やまひなどもなくて、たゞこの世はかくて、後の世の御ためとて、右大臣左大將かへしたてまつりて、かはり奉らんなどいふ御設けもなくて、中院にてかしらおろして、籠もりおたまへりしこそ、いと心にく、侍りしか。御子もおはせねば、兄の御子、今の内のおとゞ、又雅兼の入道中納言の御子、定房の大納言、養ひ給へるかひありて、位高く、たの／＼なり給へり。御能どもをつき給はぬぞくちをしく侍る。内のれとゞ

雅兼は雅定の叔父にあたるなり

の御子も少將とてふたりればすなり。

(六六) 武藏野の草

六條の右のれとゞは、大方きんだちあまたおはしき。太政のおとゞにつぎ奉りては、大納言雅俊とておはしき。御母は美濃守良任ときこえしむすめの腹なり。京極に九體の丈六つくり給へり。その御子は、はら／＼に男女あまたおはしき。伊豫守爲家のぬしのむすめのはらに、神祇、伯顯重と申しき。もとはさきの少將肥前のすけにてぞ、久しくおはせし。その同じはらに、四位の侍從顯親と申して、後は右京權大夫、播磨守など聞てえき。同じ御はらに、上野守顯俊とてればしき。中宮の御おほちにやおはすらん。憲俊の中將ときこえし、のちには、大貳になり給へりき。百良と御わらは名きこえ給ひき。又摩尼きみときこえ給ひし、左馬權頭など申しき。此の外にも、上野、越中などになり給へる聞てえき。又僧子も多くおはするなるべし。大納言の同じ御腹に、中納言國信と申しておはしき。堀河院の御をちの中に殊に親しくさぶらひ給ひけるとぞきこえ侍りし。歌よみにおはして、百首の歌人にもたはすめり。この中納言の姫君、おほい君は、近くおはしまし、攝政殿の御母、

少將ふたりは通親と通賢となり  
此の段は雅實大臣の弟雅俊中納言の子たちの傳なり

この中宮は二條院の中宮なり御名育子と申す

二位と申すなるべし。女には、入道どのにさぶらひ給ひて、さりがたき人におはす  
なり。第三の君は、今の殿の御母におはします。三位のくらの得給へるなるべし。  
うちつゞき二人の一人の人の御おほちにて、いとめでたき御末なり。この中納言の  
御子に、四位の少將顯國とおはしき。其の母は、さきの伊豫守泰仲のむすめと聞  
こえき。その少將、いとよき人にて、歌など能くよみたまひき。とくうせたまひにき。  
少將の一つはらの弟にやおはしけん。備前前司、修理權大夫、越後守などきこえ  
給ひき。又六條殿の御子に、顯仲伯と聞こえたまふ、大納言中納言などの兄にや  
おはしけん。其の母は肥前守定成のむすめの腹にやおはすらん。歌よみ、笙の笛の  
上手におはしけり。公里といひしが、調子をすぐれて傳へたりけるを、うつし習ひ  
給へりけるとぞ。その御子、淡路守宮内大輔など聞こえき。覺豪法印とて、法性寺殿  
の、佛の如くにたのませ給へるおはしき。僧子もあまたおはするなるべし。女子は  
堀河の君、兵衛の君などきこえ給ひて、皆歌よみにおはすと聞こえ給ひし。姉君は、  
もとは前齋院の六條と申しけるにや。金葉集に、  
露まげき野べにならびてきりぐす、我が手枕の下に鳴くなり。

とよみたまへるなるべし。堀河とは、後に申しけるなるべし。かやうなる女歌よみ  
は、世にいでき給はんと、かたく侍るべし。又楊梅の大納言顯雅とて、六條のれほい  
殿の御子おはしき。その末いとおはせぬなるべし。御むすめぞ、鳥羽の女院の皇后  
宮の時、みくしげどのとておはせし。女院の御せうどの、肥後の前司ときこえしは、  
大納言の聳におはせしかばなるべし。その大納言の御車の紋こそ、きらゝかに遠  
まろく侍りけれ。大かたはみの古き繪に、弘高金岡などかきたりけるにや。それを  
見てせられけるとぞ。今は乗り給ふ人も、おはせずやあらん。物などかき給ふとも、  
おはせざりけるにや。行尊僧正の許に、やり給へりけるふみの上書には、きんざう  
はうどうおんの僧正の御坊に、とぞありける。かんなゝらば、きんざうなくても  
あるべけれど、えかき給はぬ餘りにやありけん。言のはもえきこえ給はざりけり。  
唯車をぞなべてより、能くまたて、牛糞色清げにてありき給ひける、車などよく  
するは、まさなきことゝて、はげあやしくなれども、俄にかきすすたるこそ、然るべ  
き人はさもすると申すこともあるべし。これも亦一つのやうにて、つやゝかにし  
たまひけるにこそ。風などの重くおはしけるにや。ひがことぞ常にしたまひける。



雨のふるに、「車ひき入れよ。」といはんとては、「車ふる。時雨さしいれよ。」と侍りければ、車のさまぐ、そらより降らん、いと恐ろしかるべし。など思ひあへりける。かやうの事を、堀河院きこしめして、「ひがことこそ、ふびんなれ。祈りはせぬか。」と仰せられければ、御返事申されけるほどに、鼠の走りわたりければ、「されば等身の鼠作らせて候ふ。」と申されければ、おほかたいふにも足らずとなん仰せられける。これは信濃守伊綱の女のはらにおはするなるべし。同じはらに信雅のみちのくの守とてはしき。加賀守家定とて、ひさしくおはせしが、後にみちのくにはなり給へりしなり。その子は成雅の君とて、知足院の入道おとゞ、寵し給ふ人におはすと聞てえき。後には近江の中將ときこえし程に、都の亂れ侍りしをり、左大臣殿のゆかりに法師になりて、越の方に、流され給ふと聞てえし、歸りのぼり給へるなるべし。その成雅の中將の兄にか弟かにて、房覺僧正とて三井寺に驗者おはすとぞきこえ給ふ。又六條殿顯房の御子に、因幡守惟綱のむすめの内侍のはらに、雅兼の治部卿と申す中納言おはしき。才學すぐれ給ひ、公事につかへ給ふとも、昔もあり難き人になんおはしける。詩つくり、歌よみにおはしき。高くもいたりたまふべかり

しを、御病ひにより出家し給ひて、久しくおはしき。鳥羽院大事仰せられ合はせんとして、常は召しいで、對面せさせ給ふ折ども侍りけり。この入道中納言雅兼のきんだちぞ、この御流れには、上達部などにて、あまた聞てえ給ふ。右中辨雅綱と聞てえ給ひし、よく仕へ給ふとて、四位少將などに、珍らしくなりなると給へりし、とくうせ給ひにき。その御おとうとに、能俊大納言の女の御はらに、當時中納言雅頼と聞てえ給ふこそ、入道治部卿雅兼の御子には、ふみなど傳へ給ふらめ。家をつぎ給へる人にてそ。同じ御はらに、その次に、大納言定房と申すは、入道右大臣顯房の御子にし給ひて、高く昇り給へるなるべし。その御弟、四位少將通能と申すなるは、琴覺四ひき給ふとぞきこえ給ふ。清暑堂の御神樂にも、ひき給ひけるとなん。師能の辨とてはせし、養ひ申し給へると聞き侍りし、これにやおはすらん。六條のおほいどの、きんだちなど、僧も多くおはすれど、さのみ申しつくしがたし。山に相覺僧都とて、大原に住みたまふおはしき。醍醐には、大僧正定海とて、讃岐のみかどの護持僧におはしき。ならには山科でらの隆覺僧正、東大寺の覺樹僧都と申し、は、東南院ときこえ給ひき。皆やんどなき學生にればしき、又覺雅僧都とてもおはしき。歌よみにぞ

おはせし。末の世の僧など、さやうによまんは有りがたくや侍らん。白河院の、いとしもなくおぼしめしたる人にておはしけるに、俊頼のきみ、金葉集えらひて奉りたりける始めに貫之、院師「春立つとをかすがの、といふ歌、そのつきに、覺雅法師とて入り給へりけるを、貫之もめでたしといひながら、三代集にも漏れきて、あまりふりたり。覺雅法師も、げにもともつゞきればえず。」など仰せられければ、ふるき上手ども入るまじかりけり。又いとしもなくおぼしめす人、のぞくべかりけり。とて、おぼえの人をのみ採りいれて、次のたび奉りければ、「これもげにともおぼえず。」と仰せられければ、又作りなほして、源重之を始めに入れたるをぞ、とゞめさせ給ひけるは、かくれて世にもひろまらで、中たびのが世には散れるなるべし。又山におはせし妙香院の清覺内供など聞てえ給ひし、その内供の一つ腹にや、はたの御はらにや。治部大輔雅光と聞てえ給ひし歌よみおはしき。人に知られたる歌、多くよみ給へりし人ぞかし。あふまでは思ひもよらず。又、身をうち川の橋柱、などきこえ侍るめり。その御子には、實寛法印とて山にねはす。六條殿の御子は、又をとも、丹波の前司、手房和泉の前司など申してはしき。はかぐしきすゑもおはせぬなる

べし。

(六七) もしほの烟り

二條のみかどの御時、近くさぶらひ給ひて、かうの君とかきこえ給ひしは、殊の外にときめき給ふときこえ給ひしかば、内侍のかみになり給へりしにやありけん。たゞまた、かうの殿など申すにや。能くもえうけ給はり定めざりき。それこそは、手房六條殿の御子の、手房丹波守の子に、手房大夫とか申して、伊勢にこもりおたまへる御むすめときこえ給ひしか。かの御時、女御きさき、かたぐうちつゞき多くきこえ給ひしに、御心のはなにて、一時のみ、盛りすくなく聞てえしに、これぞときはに聞てえ給ひて、家をさへに作りて給はり、世にもよてあつかふ程にきこえ給ひて、みかどの御なやみにさへ、科おひ給ひしぞかし。御めのどの大納言の三位なども、いたくな参り給ひそ。など侍りけるにや。ある折は常にも候ひたまはずなどありけるとかや。且は御おぼえの事など、祈りすぐし給へる方も聞てえけるにや。且は聞きにくくも聞てえけるとぞ。重らせたまひける程に、年若き人なれば、おはしまさざらんには、いかにもあらんずらん。御消息ども、返し参らせよとありければ、

此の段は六條殿の流れの御女の傳也

なくくとりつかねて参らせければ、信保などいふ人うけ給はりて、かきあつめさせたまへる、もしほのけぶりとなりけむも、いかに悲しくおぼしけん。御ぐしの、たけにあまり給へりけるも、そぎれろさばやとぞ聞てえけれど、心づよき事かたくて、月日へけるほどに、御心ならずもやありけん。昔にはあらぬとともいできて、若き上達部の、時にあひたる所にこそ、むかへられ給ひてと、きこえ侍るめれ。めし返させ給ひけん、やんごとなきみづくきのあども、今やおぼしあはすらん。いとかしこくこそ。

六條のおとゞ、いとあさましく、末廣くおはします。昔よりふちなみの流れこそ、みかどの御おほちにては、うちつゞき給へるに、堀河院の御おほちに、めづらしくかく末さへ廣むらせ給へる、一の人の御おほちに、うちつゞきておはしますめり。六條殿の御むすめは、堀河院の御時、承香殿と申しけるは、女御の宣旨などはなかりけるにや。醍醐におはすと聞てえし、近くうせ給ひにき。堀河殿、六條どの、御おとうとに、中宮大夫師忠の大納言おはしき。その御母は、堀河の頼宗の右のおとゞの御女なり。この大納言の御子は、左馬頭師澄とて、千日の講久しく行ひ給ひて、

後は大藏卿と申しき。その御れとうとは、師親の四位の侍従など申しておはしき。又大納言の御子には、仁和寺の大僧正寛遍と申すおはしき。備中守まさなかの女の腹にやおはしけん。高松院の中宮とて、御ぐしおろさせ給ひし、戒の師にればしき。東寺の長者にて、近くうせたまひにけり。中宮大夫の御弟廣綱とてればしき。四位までやのぼり給ひけん。攝津守など申し、にや。また堀河殿などの同じはらにやおはしけん。仁覺大僧正と申し、山の座主おはしき。それは中宮大夫の兄にやおはしけん。又ことばらに、やましなでらの實覺僧都など申してればしき。莊嚴院の僧都と申し、なるべし。

此の段よりは小一條院の御子基平源宰相の御子孫の傳なり

小一條院は三條院の皇子にておはしけり

◎第八

(六八) 源氏のみやすどころ

みかどの御おほちにはおはせねど、東宮や宮たちの、御母におはせしは、後三條院の女御にて、侍従の宰相、基平の御むすめこそおはせしか。その宰相は、小一條院の御子におはしき。その源氏の御息所、御名は基子女御と申し。その御せうとにては、春宮、大夫季宗、大藏卿行宗など申しておはしき。みな三位のくらねようおはせし。大藏卿は八十ばかりまでおはせしかば、近くまできこえ給ひき。歌よみにおはしき。ふたりながら、からの文なども作り給ふとぞき、侍りし。良頼の中納言のむすめの腹のきんだちなり。女御もれなじ御はらからにおはす。又そのはらに、平等院の僧正行尊とて、三井寺にれはせしこそ、名高き験者にておはせしか。少阿闍梨など申しける折より、大峯葛城はさることにて、遠き國々山々など、久しく行ひたまひて、白河院鳥羽院、うちつゞき護持僧におはしき。仁和寺の女院待賢門の、女御まねりにや侍りけん。御ものゝけ、其の夜になりて起こらせ給ひて、俄に大事におはまましけるに、この僧正祈り申したまひければ、程なくれたらせ給ひて、御車に

この歌金葉集上  
にあり

たてまつりて、出でさせ給ひにけるあとに、ものつきに、ものうたせておさせ給へりけるこそ、いとめでたく侍りけれ。と傳へうけ給はりしか。僧正歌よみにおはして、代々の集どもにも、多くいりたまへるところき、侍れ。笙のいはやにて、  
草のいほを何露けしと思ひけん。もらぬいはやも袖はぬれけり。  
などよみ給へり。傳へきく人の袖さへまぼりつべくなんきこえ侍る。大峯にて、後冷泉院うせさせ給ひて、世のうきとなど思ひみだれてこもりおて侍りけるに、後三條院くらねに即かせ給ひてのち、七月七日まおるべき由、仰せられければ、よめる、

この歌も金葉集に

もろどもにあればと思へ山櫻花よりほかに志る人もなし。

などよみたまへり。歌よまさらんは、ほいなるべき事なるべし。いと御心もすみまさり給ひけんかし。手かきにもおはして、かなの手本など世にどまり侍るなり。ことばらぐにも、勸修寺僧正、光明山の僧都など申しておはしき。その女御の御はらに、御子あまたおはしき、東宮と申して、延久三年二月に生まれ給ひて、同四年十二月に、御年ふたつと申し、東宮にたち給ひき。永保元年八月に、御元服

勸修寺僧正は嚴覺  
光明山僧都は頼基  
とて修行尊の形な  
り系圖に見ゆ  
東宮は實仁親王と  
申し、なり

せさせ給ふ。應徳二年十一月八日、十五におはしまし、かくれさせ給ひにき。平等院の僧正は、女御の御せうとなれば、東宮の御忌にこもり給ひて、御はてすぎて、人々ちりけるに、常陸のめのとに、おくり給ふときこえ侍りし、  
おもひきや春のみや人なのみして、花よりさきに散らむ物とは、  
とよみ給ひたりける、返し御めのと、

花よりもちりぐになる身をまらて、ちとせの春と頼みつるかな。

とぞき、侍りし。これは白河院の異はらの御おとうと、後三條院の第二の御子也。東宮とおなじはらに、第三の御子おはしき。輔仁親王と申しき。延久五年正月に生まれ給へり。承保二年十二月に、親王の宜旨かぶり給ふ。この御子は、さねおはして詩などつくり給ふと、むかしの中務の宮などのやうにおはしき。歌よみ給ふとも、すぐれ給へりき。圓宗寺の花を見たまひて、

植ゑれきし君もなき世に年へたる、花や我が身のたぐひなるらん。

とよみ給へるころ、いとあはれにきこえ侍りしか。かやうの御歌ども、むくの<sup>後編</sup>かみの撰びてたてまつれる金葉集に、輔仁のみことかきたりければ、白河院は、いかに

昔の中務の宮とは  
前中書王兼明後中  
書王具平二親王を  
申す  
この歌金葉集にあ  
り

こゝに見むほど、かくはかきたるぞ。」と仰せられければ、三宮とぞかきたてまつれる。御中らひは、能くもおはしまさざりしかども、御れとうとなればなるべし。詩などは數えらすすめたく侍る也。「よろこびもなく、うれへもなし。世上の心」とかや作り給へりけるを、覺行法親王中御堂と申しておはせしが、のたまひけるは「うれへこそあれ。」との給はせけれど、位には必しも、みかどの御子なれど、つき給ふことならねば、もの志り給へる人は、なげきとればすべからず。かの仁和寺覺行法親王のみやの利口にこそあれ。何事かは御のぞみもあらむな。

(六九) 花のあるじ

三宮の御子は、中宮大夫師忠の大納言の御女のはらに、花園の左のれと有七とておはせしこそ、光る源氏なども、かゝる人をこそ申さまほしくおぼえ給へしか。まだ幼くおはせし程は、若宮と申し、に御能も御みめも、然るべき事と見えて、人にもすぐれ給ひて、常にひきもの、ふき物などせさせ給ひ、又詩つくり、歌などよませ給ひけるに、庭の櫻盛りなりける頃、濃き紫の御指貫に、直衣すがたいとをかしげにて、われもよませ給ひ、人にもよませさせ給ふとて、

此の段は後三條院の皇子にて基平宰相の女の御なる轉左大臣有仁公の傳なり

をしと思ふ花のあるじを置きながら、我がもの顔にちらす風かな。

とよみ給ひたりければ、父の宮見たまひて、「まろを置きながら、花のあるじとは、わか宮はよみ給ふか。などあいし申し給ひけるとぞ人のかたり侍りし。御とし十三になり給ひし時、うひかぶりせさせ給ひしは、白河院の御子にし申させ給ひて、院にて基隆の三位の、播磨守なりし、初元結したてまつり、右のおととて久我の雅實れとゞれはせし、御かうぶりせさせたてまつり給ひけり。御みめの清らかさ、おとなのやうに、いつしかおはして、見たてまつる人、よろこびの涙も、こぼしつべくなむありける元永二年にや侍りけん。仲の秋のころ、御とし十七とや申しけん。始めて源氏の御姓たまはりて、御名は有仁と聞こえき。やがてその日、三位中將になり給ひて、そのとしの十一月のころ、中納言になり給ひて、やがて中納言中將と聞こえき。むかしのみかどの御子、一の人の公達などおはすれど、かく四位五位なども聞こえ給はで、はじめて三位中將になり給ふ。年のうちに中納言中將などは、いとありがたくや侍らん。又その次の年、保安元年にや侍りけん。大納言になり給ひて、年をならべて右近大將かけたまひき。世の人、宮大將など申して、みゆき見る人は、

これをなん見ものにしあへるとに侍りし。白河の花見の御幸とて侍りし和歌の序は、この大將殿かきたまへりけるをば、世ぞどりてほめきこえ侍りき。

低枝折リテサ、ゲモタレバ、紅蠟ノ色手ニミテリ。落花ヲフミテ佇立スレバ、紫麝ノ氣衣ニ薰ズ。

なかき給へりける、その人のしたまへるととおぼえて、なつかしう優にはべりけるとぞ。御歌もおぼえ侍る。

かけきよき花のかゝみと見ゆるかな。のどかにすめる白川の水、

とぞきゝ侍りし。管絃はいづれもし給ひけるに、御びは笙のふえぞ、御あろびにはきこえ給ひし。すぐれてればしけるなるべし。御手もよくかき給ひて、色紙形、てらでらの額などかきたまへりき。中納言になり給ひし折にや。三の御子かくれ給ひしに、<sup>自白</sup>法皇の御子とて、御服などもし給はざりけるとかや。又うすくてやおはしけむ。院うせさせ給ひしに、色こく染め給へりける。まだつかさなども聞こえ給はざりし程は、常に法皇の御車のまりにぞ、のり給ひて、みゆきなどにもおはしける。さやうの御つゞきをねぼし出だしけるにや。院の御忌のほど参り給ひて

この歌千載集にの

有りける時、南れもての方に、ひとりおはして、さめぐぐと、泣き給ひて、御手して、涙をふりすてつゝおはしける、ものゝはさまよりのぞきて、あはれなりしと人の語り侍りし。實能のれとゞは、北の方のせうとにおはして、朝夕なれあそびきこえ給ひければ、左兵衛督など申しけるほどにや。五月五日大將殿、

あやめ草ねたくも君がとはぬかな。けふは心にかゝれと思ふに、

など心やりたまへるも、いとなつかしく、この大將殿は、殊の外に衣紋をぞ好み給ひて、上のきぬなどの、長さ短さなどの程など、こまかに志たゝめ給ひて、その道にすぐれたまへりける。大方むかしは、かやうのこともしらで、指貫もなかつみて、烏帽子も、こはく塗ることもなかりけるなるべし。此の頃こそ、さびえほうし、きらめき烏帽子など、をりくかはりて侍るめれ。白河院は、御装束まおる人など、おのづから引きつくりひなどし参らせければ、さいなみ給ひけるときこえ侍りし。いかに變はりたる世にかあらむ。鳥羽院この花園のおとゞ、おほかたも、御みめどりぐぐに、姿もえもいはすおはします上に、こまかにさせさせて、世のさがになりて、肩あて腰あて、烏帽子とゞめ、かぶりとゞめなどせぬ人なし。又せでも叶ふ

これは金葉集にあり

べき様もなし。かうぶり烏帽子のまりは、雲を穿ちたれば、さらすは落ちぬべきなるべし。時に従へばにや。此の世に見るには、袖のかゝり袴のきはなど、つくろひたてたるはつきくしく、うちどけたるは、かひなくなん見ゆる。衣紋の雜色などいひて、藏人になれりしも、この御家の人なり。上の御せうどの君たち、若殿上人も、絶えず参りつゝ、遊びあはれたるはさるとにて、百大夫と世にはつけて、かげぼしなどの如く、あさ夕馴れ仕うまつる。吹きもの引きものせぬは少くて、外より参らねど、うちの人にて御遊び絶ゆることなく、伊賀大夫、六條大夫などいふ、すぐれたる人どもあり。歌よみ、詩づくりも、かやうの人ども數えらす。越後のめのと、小大進などいひて、名高き女歌よみ、家の女房にてあるに、公達まわりては、くさり連歌などいふこと、つねにせらるゝに、三條の内のおどりの、まだ四位、少將などの程にや。

ふきぞわつらふ賤のさゝやを、

とし給ひたりけるに、中務、少輔、實重といふもの、常にかやうのとに、めし出ださるゝ者にて、

月はもれ時雨はとまれとおもふには、

とつけたりければ、いとよくつけたり。などかんとあひ給ひける。又ある時、

奈良のみやこを思ひこそやれ。

とはべりけるに大將殿、

やへさくら秋のもみちやいかならむ。

とつけさせ給ひけるに、越後のめのと、

志ぐるゝたびに色やかさなる。

とつけたりけるも、後までほめあはれ侍りけり。かやうなること、多く侍りけり。その越後は、「さこそはかりの人はつらけれ。」といふうたなどこそ、やさしくよみて侍りけれ。かやうなること、數えらすこそきこえ侍りしか。

(七十) ふしゝば

大將殿年若くおはして、何事もすぐれたる人にて、御心ばへもあてにおはしき。昔はかゝる人もやおはしけん。この世にはいとめづらかに、かくわざと物語などに、作りいだしたらんやうにおはすれば、やさしくすきくしき事多くて、これ

此の殿もはは花園  
大將有仁公の傳也



此のあたり源氏の  
はよき木の趣にか  
けり

かれ、袖よりいろくのうすやうにかきたる文の、ひき結びたるが、なつかしき  
香したる、二つ三つばかりづゝ取り出たして、常にたてまつりなどすれば、これ  
かれ見給ひて、あるは歌よみ、色好む君たちなどに、見せあはせ給ひて、この手は  
まさりたり。歌などもとりぐにいひあへり。あるは見せ給はぬもあるべし。  
又兵衛實能のかみや、少將公教たちなど参り給へば、かたみに女のとなどいひあはせつゝ、  
雨夜のしづかなるにも、語らひ給ふ折もあるべし。月あかき夜などは、車にて御隨  
身ひとりふたりばかり、何大夫などいふ人どもに、かはるぐ、かちよりあゆみ、  
御車に参りかはりつゝ、ふるき宮ばら、あるは色好む所々にわたり給ひつゝ、人に  
うちまぎれて遊びたまふに、びは笙のふえなどは、人もきゝまりなんとて、こと  
ひき、笛などぞし給ひける。ある折は、歌よむ御たちまうでかよひける中に、ほいな  
かりけるにや、女、

此の歌千葉集にあ  
り

かねてより思ひしものをふしゝばの、こるばかりなる歎きせんとは、  
とて奉りたりければ、やがてふしゝばと付け給ひて、折ふしには、音づれ奉り  
ければ、今宵はふしゝば、音すらむものをなどあるに、すぐさず歌よみて奉りなど

して、いたきものどて、常に申しかはす女ありけり。土御門のさきのいつきの御も  
とに中將の御とかいひけるものどかや。北の方は、手かき歌よみにおはして、いと  
いうなる御中らひになむありける。あまりほかにやおはしけんと聞こえしは、  
鳥羽院くらねの御時に、大將殿菊をほりにやりて、奉り給ひけるに、うすやうに  
かきたる文の、むすびつけて見えければ、みかど御覽じつけて「かれは何ぞ。取りて  
参れ。と藏人に仰せられけるに、おほい殿は、ふと心えて色もかはりて、うつふし  
めになり給へりけるほどに、みかどひろげて御覽じければ、

九重にうつろひぬとも菊の花、もとのまがきを忘れざらん。

待賢門院

とぞありける。きさいの御姉におはすれば、ときぐ参りかよひ給ふにつけつゝ、  
志のびてきこえ給ふとなどもおはしけるなるべし。昔のみかどの御世にも、かや  
うなる御とは聞こえて、なほくなど仰せられければ、餘りなるとも侍りける  
やうに、これもおはしけるにや。殿の色好み給ふなど、大方うへはのたまはせず、  
へだてもなくて、文ども取り入れて、歌よむ女房にかへしせさせなどし、上のめの  
どの車にてぞ、女おくり迎へなど志たまひける。殿もこゝかしてにありき給ひ

ける、家の女房ども、をどこの許よりえたる文をも、その北の方に申しあはせて、歌の返しなどし給ひける。小大進などいふ色好みの、をどこのもとより得たる歌とて、申しあはせける、あまた聞てえしかど、忘れておぼえ侍らす。按察の中納言とかいふ人の、おほやうなるも、歌などつかはしけるかへりごと、小大進、

夏山のまげみが下の思ひ草、露志らざりつこゝろかくとは、

などき、侍りし。口とく歌などをかしくよみて、和泉式部などいひしもの、やうにぞ侍りし。伊豫の御とて侍りしも、中院の大將雅定の、若くおはせしほどに、ものなどのたまひて、後には、山城とかいふ人に、物いふとき、給ひて、さきにも申し侍りつる、みとせもまたで、といふ歌よみ給へりしぞかし。かやうに色好みたまへるごたち多くこそきこえ侍りしか。

(七一) 月のかくる、山のは

このおとりの御子のれはせぬぞ、くちをしけれど、かへりてはあはれなる方もありて、なごりをしく侍りて、我れものたまはせけるは、いとしもなき子などのあらむは、いとほいなかるべし。村上のみかどの末、中務の宮のうまごといふ人々を見る

此の段は花園大臣の御はらからるの傳なり

高松院は二條帝の中宮御名姝子鳥羽の皇女におはし

に、せさるとなき人々どもこそ多く見ゆめれ。我が子などありども、かひなかるべし。などぞ有りける。姫君こそおはすなれ。北の方の御はらにはあらで、うちにつかひ給へりけるわらはの、多くの人のなかに、いかなるすぐせにか、生みきこえたるどなん。上西門院にぞおはすと聞てえ給ふ。琴琵琶なども、ひき給ふとも志られでおはしけるに、月あかき夜、志のびてかきならし給ひけるより、あらはれ給ひけるとかや。又ことばはらに、女君きこえ給ふは、高松院に参りかよひ給ひて、殿上人の車などつかはして、迎へなどせさせ給ふとかやぞきこえ給ふ。大將殿、いづれの程にか侍りけん。年頃すみたまひし、れん冷泉せい、東の洞院よりにや侍りけん。な、夜、かちより御束帯にて、石清水の宮に、参り給ひけるに、光清ときこえし別當、御設けなど、房とかいふにして、御きそく聞てえけれど、殊更にたちやどることなくて、此の度は参らむと心ざしたれば、えなむ入るまじきとて、より給はざりけるに、七夜まわり果て給ひける夜、みつといふところにおいて、たてまつりける。

さいはいとさんぞのおまへ伏しをがみ、七夜のねがひとをながらみて。

とよめりけるを、御神のみととたのまんとて、御ふところに納めさせたまひて、

かへさに、乗り給ふ御馬鞍おきながら、引きて給はせける。その御ども人など、いかばかりなる御心ざしにて、かくかちの御物まうで、夜をかさねさせ給ふらん。あら人神、昔の帝におはしませば、流れのどだえさせ給ふ御事にやなどおぼつかなくおぼえけるに、臨修正念往生極樂、としのびて唱へさせ給ひける御ねぎにて、有仁あはれにかなしくうけ給はりし。ときこえ侍りける。おほいどの、後には大將も辭し給ひて、たゞ左のおとゞとておはしき。仁和寺に花園といふ所に、山里作りいだして通ひ給ひき。四十にあまりてや、うせ給ひにけむ。近くなりては、御ぐしおろし給ひけるに、すがたは猶昔にかはらず、清らにて、少しおもやせてぞ見え給ひける。岩倉なるひじり呼びて、烏帽子直衣にて出で、御ぐしおろし給ひける。いとかなしく、見奉る人も、涙おさへがたくなんありける。ちちのめのと、風いたみける頃、花にさして、

われはたゞ君をぞをしむ風をいたみ、散りなん花は又も咲きなん。

とよみたまひけるを、めのとは常に語りつゝ、こひかなしみける。この大將殿、帝のうまご、宮の御子にて、たゞ人になり給へる、此の世には珍しく、聞きたてまつるに、

るに、なさけ多くさへおはしける。いとありがたく、きこえたてまつりしに、まださかりにて、雲かくれ給ひにけむ。いと悲しくこそ侍れ。かの花園も、雲けぶりとのぼりて、あとさへ残らぬと聞き侍るこそ、あはれに心うけれ。そのわたりに詣で通ひける人、

いづくをか形見ともみん夜をこめて、光り消えにし山のはの月、

仁三のみこの御子には、また信證僧正とて、仁和寺におはしき。鳥羽院御ぐしれろさせ給ひし時、御戒師におはしき。又山にも僧都仁の君などいひて聞てえ給ひき。一定にもなかりしにや。院よりおほい殿に尋ね申させ給ひけるとかや。御むすめは、おほい殿の一つ腹に、伊勢のいつきにて下り給へりき。後は伏見の齋宮守子女王と申し、これにやおはすらん。又行宗の大藏卿の女のはらに、齋院守子女王もれはするなるべし。此の比むそちなどにや、餘り給ふらん。そのいつきにおはせし比、おほい殿、本院に有栖川のもとの櫻のさかりなりけるにおはして、歌などよみ給ひけるに、女房の歌とて、

散る花を君ふみわけてこざりせば、庭のおもてもなくやあらまし。

と予きこえし。

(七十二) はらぐの御子

きさいの宮、女御更衣におはせねど、御子うみたてまつり給へるところぐ、近き御代にあらた聞こえ給ひき。后ばらの宮たちは、皆申し侍りぬ。ちりぐにうち續きかはします多くきこえ給ふ。白河院のきさきばらの女宮、みどころの外に、承香殿の女御の生みたてまつり給ひしは、伊勢のいつきにおはしき。それは女四宮御子なるべし。女五宮も、天仁元年霜月のころ、御占御子にあひたまひて、齋宮ときこえ給ひき。御はらは、いづれにかおはしけん。ひがことにや侍らん。季實とか聞こえし。むすめにやれはしけむ。勢賀院の齋宮と申しも、同じ比、立ち給ふと聞こえき。それは頼綱ときこえし、源氏の三河守なりしが、女のはらにおはすと聞こえき。七十にあまり給ひて、まだおはすと聞こえ給ひき。唐崎のみそぎ、上西門院せさせ給ひし比、そのつゞきに、院の御さたにて、殿上人など奉らせ給ひけり。どのもりのかみ何大夫とか名ありし人、御後見にて、御車のまりに、綾の指貫、院のれろして着てわたるなど、聞こえき。男は此の世には、多く佛の道に入り給ひて、御元服も

此の段は白河院鳥羽院崇徳院後白河院二條院の皇子たち之事をも記せり

承香殿の女御は内大臣能長の女御子と申し也

かたくて、うへの御ぞの色なども、たづねえ侍らぬ折々もはべるとかや。位おはしまさぬほどは、淺黄あさぎと日記に侍るなるをば、青き色か。黄なるか。なほればつかなくて、花園のれほいどのに、尋ね奉られけるも、をさなくしておぼえ給はぬよし申したまふなど聞こえし。一宮の御元服のは、黄なるを奉りけるなるべし。位まだえさせ給はねば、黄なる衣ぞ、誠にもおはしますらん。無位の人は、黄袍なるべければ、小野墓が、隱岐より歸りて、作りたる詩にも、「請ふ君菊を愛せば、我れをみるべし。白きことはかうべにあり。黄なることは衣にあり。などぞきこえ侍りし。神の社の黄狩衣なども、位なきうへのきぬの心なるべし。かやうのついでに、ある人の申されけるは、つるばみのころもは、王の四位の色にて、たゝ人の四位と、王五位とは、くろあけを着。たゝ人の五位、あけの衣にてうるはしくはあるべきを、今の人心およすげて、四位は王の衣になり、五位は四位のころもを着るなるべし。檢非違使上官などは、うるはしくてなほあけをあらためざるべしとぞ侍りける。佛の道に入りたまへるは、此の頃うちつゞかせ給へり。仁和寺に覺行法親王と聞こえたまひしは、白河院のみこにおはす。御々しおろさせ給ひて、やうくおとなに

師明親王法名性信  
と申す

成らせ給ふほどよ、いとかひくしくおはしければ、さらば親王の宣旨かぶり  
給ふとぞ聞てえ侍りし。おほ御室とておはしまし、は、三條院の御子、師明親王と  
きこえ給ひし、まだちこにおはしまして、御子の御名えたまひければ、法師の後は、  
親王の宣旨かぶり給はず。うの宮につけ奉りたまひしに、御弟子の宮はわらはに  
て、親王の御名をえたまはねば、親王の宣旨かぶりたまへり。後二條のれど、出家  
の、ちは、例なき由侍りけれども、白河院、内親王といふこともあれば、法親王も  
などかなからん。とてはじめて法師の後、親王ときこえ給ひしなり。かくて後ぞ、  
うちつゞきいづくにも出家の後の親王ときこえ給ふめる。そのれどうとにて、  
覺法々親王ときこえたまひしは、六條の右のおどりの御むすめの生み奉り給へ  
りし、法性寺のれどりのひとつ御はらからにおはす。さきに申し侍りぬ。みかどの  
御子、關白など、一つはらにおはします、いとかたきことなるべし。この御室は、  
おほきに、聲清らかなる人にぞれはしける。眞言の道よくならひ給ひ、又手かき  
にてもおはしけり。御堂の色紙形などかき給ふときこえ給ひき。高野の大師の、  
手かきにおはしければにや。御室たちも、うちつゞき、手かきにぞおはすなる。高野

へまうでたまひける道にて、

定めなきうき世の中とまりぬれば、いづくも旅の心ちこそすれ。

とよみたまへりけるとぞ。横河の覺超僧都の、よろづの事を夢とみるかな。といふ  
歌思ひ出でられて、あはれにきこえ侍る御歌なり。又仁和寺に花藏院の宮とても  
おはしましき。それは異御はらなるべし。御母は大宮の右のおどりの御子に、なで  
しこの宰相とかきこえ給ひしむすめとぞ。六條殿とかきこえ給ひて、のちには  
九條の民部卿にれはしけるとかや。此の宮はいみじくたふとき人ときこえ給ひ  
き。長尾の宮とも申しき。又三井寺、大僧正行慶と聞てえたまひしもれはしき。備中  
守政長と聞てえし人の、むすめのはらにおはす。これも眞言よく習ひ給へるなる  
べし。この院も、この僧正にぞ行ひのこと受けさせ給ふときこえし。法性寺の  
おどりの御子、御子おろし給ひて、御戒の師にし給ふともきこえき。こまの僧正とも  
申すなるべし。天王寺へ詣でたまひけるに、難波をすぎ給ふとて、

夕暮に浪花わたりを見渡せば、たゞうす墨のあしでなりけり。

となむきこえし。こと所のゆふべの望みよりも、なにはのあしでと見えん。げにと

この歌千載集にあり

聞こえ侍り。歸る雁のうすゞみ、夕暮のあしでになりたるも、やさしくきこえ侍り。又若御前行法眼ときこえ給へりしも、白河院の御子にやれはしけむ。みちのれくのかみ、有宗といひしが女のはらにれはすとぞ。堀河のみかどの宮たちは、山に法印など聞こえたまひし、後には座主になりて、親王の宣旨かぶり給ひて、座主の宮ときこえき、伊勢守時經とて、傳の大納言道綱の末と聞こえし、むすめの生みたてまつれるとぞ。又仁和寺の花藏院の大僧正宣慶と申し、は、近江守隆宗と聞こえしが女のはらときこえ給ひし。僧正御身の沈み給へるを、おもほしける時、よみたまへりける。

さみだれのひまなき比のまづくには、宿もあるしも朽ちにけるかな。

とぞきこえ侍りし。身をしるあめ、時にもあらぬまぐれなどや、御袖にふりそひたまひけむと、いとあはれに聞こえ侍り。女宮は、大宮の齋院好子ときこえ給ふおはしき。やがて彼の大宮四條宮御子の女房の、生みたてまつれりけるとなん。又さきの齋宮好子も、堀河院の御むすめときこえ給ふ。まだ此の比もおはするなるべし。鳥羽院の宮は、女院ふたところの御はらの外に、三井寺の六宮道基、山の七宮貴快とておはします。御は、

石清水の流れとなん、聞きたてまつりし。俊頼の撰集に、鹿の歌など入りて侍り。光清法印とかいひける。別當のむすめとなむ。小侍従などきこゆるは、小大進が腹にて、これはさきのはらからなるべし。白河院の御時より、近くさぶらひて、鳥羽院には、御子あまたおはしますなるべし。又その同じはらに、あや御前ときこえさせたまふ御道基ぐしおろして、雙林寺といふ所にぞ、おはしますなる。寺の宮は、ひと、せうせ給ひにき。やまのは、法印など申し、親王になり給ふとぞ。又宰相の中將家政ときこえし御むすめ、待賢門院にれはしけるも、鳥羽院の御子生みたてまつり給へりし、吉田の齋宮好子と申しき。それもうせ給ひて、八九年にもやなり侍りぬらん。あまにならせ給ひて、智恵深く、尊くきこえさせ給ひき。その御母こそは、あさましくてうせ給ひにしか。河内守俊賢なにかしどか、いひしが子なる男成賢の、いかなる事もありけるにか。失ひ奉りたるとて、おやも罪かぶりて、都にもすまざりき。又徳大寺の左のおとゞの御むすめとて、鳥羽の女院に候ひ給ひけるも、女三のみこ生み給ひて、かすがの姫宮御子ときこえ給ふ。冷泉の姫宮と申すにや、其の母を春日殿と申すなるべし。又勢賀院の姫宮、齋院のひめ宮、高松の宮など聞こえさせ給ふも、

おはしますなるべし。鳥羽院の宮たちは、をどて女、きさきばら、たゞのなど取り加へ奉りて、男宮八人、女宮八九人ばかり、おはしますなるべし。讃岐院の一の御子ときこえ給ひしは、重仁親王と申しけるなるべし。うの御母、院に具し奉りて、遠くればしたりけるが、歸りのぼり給へるとぞきこえ給ふ。みかど位におはしまし、時、きさいの宮、一の人の御むすめにておはしますに、うちの女房にて、かの御母、官仕へ人にてさぶらひ給ひしが、殊の外にときめき給ひしかば、きさきの御方の人は、めざましく思ひあひて、人の心をのみはたらかし、世の人も、あまりまばゆきまで思へるなるべし。さりとして、御後見のつよきもおはせず。たゞ大藏卿行宗とて、とし七十ばかりなるが歌よみによりて、親しく仕うまつりなれたるを、おやなどいひて、兵衛佐などつけ申したるばかりなれば、さるべき方人もなし。誠の親は、をどこにはあらで、紫の袈裟など給はりて、白河の御寺のつかさなりけり。それもうせて、年へにけり。然るべき人の子なりけれど、をどこならねばかひなかるべし。常にさぶらふ、何の中將などいふ人の、がたこゝろあるなども、目をそばめらるゝ様にて、はしたなくなんありける。されど、類ひなき御心ざしを

さりがたきとにて、過ぐし給ふ程に、をのこ君生み出だし給へれば、中宮にはまだかゝるともなきに、いと珍らしく、いとゞ安からぬつまなるべし。御おほちの一院も聞かせ給ひて、迎へとり給ひて、女院の御方に養ひ申させ給ふ。やうくうちの御めのとこの、播磨守、伯耆守などいふ人も、彼のさとや、局などの女房などかみしものことゞも、取りさたすべき由うけ給はりて、仕うまつり、若宮の御めのと刑部卿などいひて、大貳の御めのとをどこときこゆ。みこも親王の宣旨などかぶり給ひて、御元服などせさせ給ひぬ。かくて年月すぐさせ給ふ程に、位さらせ給ひて、新院とておはしますにも、世に類ひなくて、過ぐさせたまへば、きさいの宮、殿の御わたりには、心よからず。疎きとにてのみおはします。本院の御まゝなれば、世を心にまかせさせ給はず、うち、中宮、殿などに、ひとつにて、世の中すさまじき事多くて、おはしますべし。かやうなるにつけても、わたくしものにおもほしつゝ、過ぐさせ給ふに、法皇かくれさせ給ひぬる後、世の中事も出できて、讃岐へ遠くおはしましにしかば、やがて御船に具し奉りて、かの國に年歴給ひき。一の御子も、御ぐしおろし給ひて、仁和寺大僧正寛暁と申し、につかせ給ひて、眞言など

ならばせ給ひけるに、敏くめでたくおはしましければ、昔の眞如親王もかくやと見えさせたまひけるに、御足のやまひおもくならせ給ひて、ひとせうせさせ給ひにけり。御とし廿二三ばかりにやなり給ひけん。讃岐にも、御なげきのあまりにや。御惱みつもりて、かこにてかくれさせ給ひにしかば、宮の御は、ものぼり給ひて、かしらおろして、醍醐のみかどの御母方の、御寺勸修寺のわたりにぞ、住み給ふなる。かの院崇徳の御にほひなれば、ことわりと申しながら、歌などこそ、いとらうありてよみ給ふなれ。のぼり給ひたりけるに、ある人のとぶらひ申したりければ、君なくて歸る波路に志ほれこし、袂を人の思ひやらなん。

と侍りけるなん、さこそはと、いと悲しく推し量られ侍りし。院の御おとうどの、仁和寺の宮覺性はしまし、程は、とぶらはせ給ふと聞てえしに、宮もかくれ給ひて、心ぐるしく思ひやり奉るあたりなるべし。その遠くおはしましたりける人の、まだ京におはしけるに、白河に池殿といふ所を人の造りて、御覽せよなど申しければ、わたりて見られけるに、いとをかしく見えければ、かきつけさせ給ひけるとなむ。

師隆の大藏卿は顯房の甥なり

音羽川せき入れぬ宿の池水も、人の心は見えけるものを、

とぞき、侍りし。又讃岐院の皇子は、それも仁和寺の宮におはしますなる、法印元性にならせ給へるとぞ、聞てえさせたまふ。それも眞言よく習はせ給ひて、勤め行はせ給へりとぞ。上西門院御子にし申させ給へるとぞ。其の御母は師隆の大藏卿の子に、參河權守師隆と申す人おはしけるむすめの、讃岐のみかどの御時、内侍のすけにて、候はれしが、生みたてまつり給へるとぞ、聞てえさせ給ふ。讃岐の法皇、かくれさせ給へりける頃、御服は、いつか奉ると、御室覺性より尋ね申させ給へりければ、うきながらその松山のかたみには、こよひぞ藤の衣をばきる。

とよませ給へりける。いとあはれに悲しく、又御行ひはて、やすませ給ひけるに、嵐はげしく、瀧の音むせびあひて、いと心ぼそく聞てえけるに、

夜もすがら枕におつる音きけば、心をあらふ谷川の水、  
とよませたまへりけるとぞ聞てえ侍りし。昔の風ふき傳へさせ給ふ。いとやさしく、女宮は聞てえさせ給はず。今の後白河一院の宮たちは、あまたれはしますとぞ。きさきばらの外には、高倉の成子三位と申すなる御はらに、仁和寺の宮覺性の御室傳へて



六條宮におはせし  
妹宮は皇子内親王  
とて高院氏の御は  
ら也

おはします也。また若くおはしますに、御行ひの方も、梵字なども、よくかゝせ給ふ  
と聞こえさせ給ふ。ふつきに御元服せさせ給へる、おはしますなるも、御ふみにも  
たづさはらせ給ひ、御手など、かゝせ給ふと聞こえさせ給ふ。その宮も、宮たち設け  
させ給へるとぞ。おなじ三位の御はらに、女宮もあまたおはしますなるべし。伊勢  
のいつきにて、あねおとどおはしますと、聞こえさせたまひし、おとど皇子の宮は、  
六條院の宣旨、養ひ奉りて、かの院つたへておはしますとぞ聞こえさせ給ふ。又賀  
茂のいつきにもおはするなるべし。又女房のさぶらひ給ふなる、御おぼえの、なに  
がしのぬしとか聞こえし、妹のはらにも、宮たちあまたおはしますなるべし。三井  
寺に法印僧都など聞こえさせ給ふ。また女宮もおはしますとぞ。大炊御門の右の  
おとど公能の御むすめも、姫宮生み奉まつり給へる、おはしますと聞こえ給ふ。又こと  
はらの宮々もあまたおはしますなるべし。二條のみかどの宮たちも、おとど六條院尊直宮  
女皇子きこえさせ給ふ。その女宮は、内の女房うみたてまつりたまへるとぞ。中原の  
氏の博士のむすめにぞおはすなる。男宮は源氏のうまのすけとかいふ、むすめの  
腹にたはしますとぞ聞こえ給ふ。又徳大寺のおとど實能の御女のはらとか聞こえ

給ふは、位二條帝につかせたまへりし、さきに申し侍りぬ。又かんのきみの御おとうとに  
おはしけるが、生みたてまつり給へる、おはしますと聞こえさせたまふ。かく今の  
世の事を申しつゞけ侍る。いとかしこく、かたはらいたくも侍るべきかな。

此の段よりは清和天皇以來の事どもを何れとなく書き集めしなり。今この世の事と云々は老嫗の詞なり。さば昔語りも云々といふより嫗の物語を聞きおる人の詞なり。

◎第九

(七三) あしたつ

今の世のことは、人にぞ問ひ奉るべきを、よしなきこと申しつゞけ侍るになん。などいへば、「さらば昔語りも、猶いかなる事か聞き給ひし。語り給へ。」といふに、「おのづから見き、侍りし事も、ことつゞきにこそ、思ひいで侍れ。且はき、給へりし事も、たしかにも覺え侍らず。傳へうけ給はりしことも、思ひ出づるにまたがひて、申し侍りなん。かたちこそ人の御覽じ所なくとも、いにしへの鏡とは、なかなか侍らざらむ。」とて、むかし清和のみかどの御時、かたぐ多くればしける中に、ひとりの御息所の、<sup>清和</sup>太上法皇かくれさせ給へりける時、御經供養して、佛の道とぶらひ奉られけるに、御法かきたまへりける、色紙の色の、ゆふべのそらのうす雲などのやうに、墨染なりければ、人々怪しく思ひけるに、むかし賜はりたまへりける、御ふみどもを色紙にすきて、御法の料紙に、なされたりける也けり。それよりぞ、多く色紙の經は、世に傳はれりけるとなん。かきとゞめられたるふみなども侍らんものを、橘の氏、<sup>黄相</sup>贈中納言ときこえ給ひし、宰相の日記にぞ、この事は

かゝれたると聞てえ侍りし。

村上の御時、枇杷の大納言延光、藏人頭にて御おぼえおはしけるに、少し御けしき  
 九がひたるともればせで過ぎ給ひけるに、心よからぬ御けしきの見えければ、  
 あやしく恐れおぼして、こもりお給へりける程に、めしありければ、いろき参りて  
 おはしけるに、年ごろはおろかならず、たのみて過ぐしつるに、くちをしきことは、  
 藤原雅材といふ學生の、つくりたるふみのいとほしきあるべかりけるをば、など  
 藏人になるべき由をば奏せざりけるぞ。いと頼むかひなく、いと仰せられければ、  
 ことわり申す限りなくて、やがて仰せ下されけるに、みくらの小舎人、家を尋ねて  
 かねて、かよふ所ありとききて、その所にいたりて、藏人になりたる由告げれば、  
 その家あるじのむすめの男、所の雑色なりけるが、藏人に望みかけゝるをりふし  
 にて、我がなりぬると喜びて、祿など饗應せむ料に、俄に親しきゆかりども呼びて、  
 營みけるほどに、小舎人、雑色どのにはたはせず。秀才殿雅村のならせ給へるなり。」と  
 云ひければ、あやしくなりて、家あるじいかなる事ぞと尋ねけるに、雑色がめの、  
 あねか。おどうとかなる女房の、まかなひなどしけるを、この秀才志のびて通ひ

つゝ、局に住みわたりけるを、「かゝる人ころおはすれ。」と、家の女どもいひければ、  
 「よもそれは藏人になるべきものにはあらじ。ひがことならむ。」と謂ひけれど、  
 小舎人、その人なりといひければ、雑色も家あるじも、耻ちがましくなりて、「かゝる  
 者かよふにより、かゝる事は出でくるぞ。」とて、夜のうちに、その局の志のびづまを、  
 追ひ出だしてけり。その事を、いかでか雲の上まできこしめしつけゝむ。いとほし  
 きことかな。さては出で仕うまつらんに、装ひの然るべきも叶ひがたくやあらん。」  
 とて、くらつかさに仰せられて、くらのかみ調へて、さまざまの天の羽衣たまは  
 りてぞまねりつかへける。その作りたる詩は、釋奠とかに、鶴九つのさはになく。  
 といふ題の序を、かきたりけるとぞ。詞をばえ覺えず。その心は、廻り翔けらんとを、  
 蓬が島にのぞめば、霞の袖、いまだあはず。ひく人やあると、浅茅が山に思へば、  
 霜のうはげ、いたづらに老いにたり。といふ心なり。又村上のみかど、かの大納言に、  
 「われなからん世に、忘れず、思ひ出たさんすらむや。」など、のたまはせければ、  
 「いかでか、つゆ忘れ参らせ侍らん。」と答へ申されけるを、「折節には思ひ出たす  
 ども、いかでか常にはわすれざらむ。」と仰せられければ、「御ぶくをぬき侍らで、

この世をおくり侍らんずれば、かはらぬ袂の色に侍らば、忘れ参らすまじきつま  
には侍るべき。」と奏し給ふ。誠にその契りにたがはず、おはしければ、後のみかどの  
御時も、色ながら事に従ひ給ひけるを御らんじて、御涙も押へあへず、悲しませ  
給ひけるとぞ。かの大納言の夢に、先帝を見たてまつりて、作り給へる詩、きこえ  
侍りき。夢のうちにも、夢のうちのとをまらましかば、たどひこの生を送るとも、  
早くはさめざらまし。とぞおぼえ侍る。夢とまりせばさめざらましを、といふ歌の  
同じ心なるべし。

(七四) 祈る志るし

圓融院の御時にや、横川の慈惠大僧正参り給へりけるに、眞言の行ひの時、行者の  
本尊になるとは、あるべきさまをするにや。又誠に、佛になるとにてあるか。と、  
問はせ給ひければ、僧正答「その印をむすびて、眞言を唱へ侍らんには、いかでかならぬ  
やうは侍らん。」と、答へ申し給ひければ、五壇の御修法に、みかどあはせ給ひて、  
御覽じけるに、阿闍梨の印をむすびて、定に入りたるとは見ゆれども、もとの姿  
にてこそはあれ。と仰せられければ、僧正「誠に本尊になりて侍るを、御さはりも、のぞ

此の段は圓融一條  
兩帝の御時の事と  
もなかり

こらせたまひ、御功德も、重ならせおはしましなば、御覽せさせ給ふこともおはし  
ましなん。」と申し給ひけるに、たびく重なりて、御覽じければ、大僧正不動尊の  
かたち、本尊と同じやうになりて、けしやきして居給ひたりけるに、廣澤の僧正も、  
又降三世になりたまひたりけるが、程なく例の人になり、又佛になりなどし給ひ  
けり。いま三人は、元のさまにて、佛にもならず。かく御覽じて後、大師まわり  
給へりけるに、院「誠にたふとき事を拜みつることの、よに有り難き。」と仰せられて、  
「寛朝こそいとはしかりつれ。心の亂れつるにや。程なく姿のもとの様になりかへ  
りつる。」と仰せられければ、大師の申したまひけるは、僧正「寛朝なればまかりなるに  
こそ侍れ。」とぞ奏し給ひける。

禪林寺の僧正深覺ときこえ給ひけるが、宇治のれほき頼通おとゞにやれはしけん。時の  
關白殿のもとに、消息たてまつりて、詞「法藏のやぶれて侍る、修理して給はらむ。」と  
侍りければ、家の司何のかみなどいふ、うけ給はりて、下家司などいふ者つきがみ  
具して、僧正の坊にまうで、「殿より法藏修理つかまつらんとて、破れたる所々、  
記しになむ参りたる。」と申しければ、僧正呼びよせ給ひて、「いかにかく不覺には

おはするぞ。おほやけの御後見も、かくてはいかゞし給ふと申せ。」とはべりければ、還り参りて、「家司志るしに詣で侍りつれども、いづくなる法藏とも侍らず。いかにか心得ぬやうには待るぞ。おほやけの御後見も、いかやうにか、御さた候ふらん。など思ひかけず、心得ぬ御返事なむの給はせつる。」と申しければ、「こはいかに。さはいかにすべきぞ。」など仰せられければ、年老いたる女房の「あれは御はらのそこなはせ給へるを、みのりのくらは待るものを」と申しければ、さもいはれたると、さもあらんとて、まなの御あはせども調へて、奉り給へりければ、「信正詞材木給はりて、やぶれたる法藏つくろひ侍りぬ。」とぞきこえ給ひける。此の頃の人ならば、關白殿に申さずとも、行事古隠して給こと、僧井いましなどいふものに、心あはせて、調へさせらるべけれども、かく申され侍りとかや。かの僧正敬通大二條殿の限りにおはしましけるに参り給ひて、圍碁うたせ給へと申したまひければ、いかにあさましき事など侍りけれど、あながちに侍りければ、やうぞあらむとて、碁盤どりよせ、かきおこされたまひて、うたせ給ひけるほどに、御はらのふくれへらせ給ひて、一番がほどに、例さまにならせ給へりける、いとありがたき驗者に侍り

けり。經などよみ、祈り申しなどせさせ給はんだに、かた時の程に、めでたく侍るべきに、碁うちてやめ申させ給ひけんも、たゞ人にははせざるべし。むかし勘解由有國長官なりける宰相の、まだ下藤におはしける時、親の輔通豊前守にて、筑紫に下りける供にまかりたりけるに、その父國にてわづらひて失せにけるを、その子の父の爲に、泰山府君の祭といふ事を、法の如くに祭のそなへどもとゞのへて、祈りこひたりければ、その親生きかへりて、語られ侍りけるは、炎魔の廳に参りたりつるに、云ひしらぬ備へを奉りけるによりて、返し遣はすべき定めありつるに、その中に、親の輔通をば返しつかはして、その代はりには、子の有國をば召すべき也。その故は、道のものにもあらで、たはやすく此の祭を行ふ科あるべしと定めありつるを、ある人の申されつるは、孝養の志ある上に、遠き國に道の人の然るべきもなければ、重き罪にもあらず。有國めさるまじとなん覺ゆる。と申さるゝ人ありつるに因りて、皆人いはれありとて、おや子どもにゆるされぬ、となん侍りけるとぞ。その流れの人の、才も位も、高くおはせし人の語られ侍りける。

一條院の御時などにや侍りけん。六位の史を経て、かうぶり給はれるが、縣召に、心高く播磨國の司望みければ、こと人をなされけるに、たびく墨をすりてかきつけらるれども、おほかた文字のかゝれざりければ、いかゞすべきと定められけるに、播磨の國望む申しふみを、皆とりあつめて、かゝるべき定めありて、選びずて九る申しふみどもをも、れほつかの中よりもどめ出で、皆かゝれるに、かの史、大夫相尹とかいふが名の、あざやかに書かれたりけるとなむ。齋信民部卿の宰相におはしけるとかや。その座にて見給ひければ、ちひさき手して、筆のさきをうけて、かゝせぬとぞ見給ひける。聖天供をして祈りける志るしになむありける。その供は、勸修僧正とかの、せられけるとかや。たしかにも覺え侍らず。かく聞き侍りしを、又人の申しは、一條院の御時、長徳四年八月廿五日、外記の巡にて、佐伯公行といふ者こそ、播磨守にはなりたれ。かの國の史生とかにてありけるとかや。相尹といふものは、なりたることも見えすと申す人もありきとなむ。

(七五) からうた

一條院は御心ばへも、能も、すぐれておはしましける上に、然るべきにや侍りけん。

此の段は一條院の御時の事をかけり

上達部、殿上人、みちくの博士、たけきもの、ふまで、世にありがたき人のみ、多く侍りける頃になん、おはしましける。常は春風秋月の折ふしに付けつゝ、花のこすゑをわたり、池の水に浮かぶをすぐさず、もてあぞはせ給ひけるに、御をちの具平中務官、はじめて其の筵に参り給へりけるに、ならばせたまはぬ御有様に、御かうぶりの額も、つむる心ちせさせ給ふ。御帶も御志たうづも、いぶせくのみ覺えさせ給ひけるに、御あそびはしまりて、藤民部卿、四條大納言、源大納言、侍従大納言などいふ人たち、周文王の車の右にのせたるなどいふ詩の序、以言と聞こえし博士のつくりたる、詠し給ひけるにぞ、御子の御かうぶりも、御よそひも、くつろぐやうに覺えさせ給ひて、面白くすゞしく覺えさせたまひける。かの村上の中務官、ふみつくらせ給ふ道など、すぐれておはしましければ、齋名以言など、いふ博士、常に参りて、ふみ作らせ給ふ御ともになむありける。大内記保胤とて、中にすぐれたる博士、御師にて、文は習はせ給ひける。その保胤にはこれらが文、作り得たるところ得ぬ所の有様、問はせ給ひければ、答へ申しけることこそ、からの言の葉は知らぬことなれど、面白く聞こえ侍りしか。いづれもく、とりぐに侍るを、譬ひにて

申し侍らんとて、齋名が文作り侍るさまは、月のさえたるに、なかばふりたる檜皮  
葺の家の、御簾どころぐはづれたるうち、女の箏のことひきすましたる様に  
なん侍る。以言詩は、砂子白くちらしたる庭の上に、櫻の花散りしきたるに、陵王  
舞ひたるになん似てぞはべる。匡衡がやうは、ものゝふのあけの革して、緋威の  
かゞやきたるきて、えならぬ駒の足どきに乗りて、逢坂のせきをこゆる景色なり。  
とぞ申しける。さて宮「そこはいかゞ」と仰せられければ、「既に檳榔毛にのり侍り  
にたり。」とぞ申し侍りけるとなむ。

彼の齋信の藤民部卿、鷹司殿の屏風の詩、選びたてまつられけるに、日野の三位資業の  
詩多くいりたりけるを、義忠といひし、贈宰相の難じて、「色の糸、ことばつゞりて、  
春風に任せたり。」といへる、糸といふ文字、平聲にあらず。ひがとなりと申すと  
きゝて、民部卿、文集の詩の句の「うるはしきとば、色の糸をつゞれり。」と云へる  
を考へて奉られたりければ、宇治のおほきれとゞ、むづからせ給ひて、「いかにかゝ  
るひが難をば申しけるぞ。」とて、勘當せさせ給ひて、あくる年まで、免させ給はざ  
りければ、義忠の三位、女房につけて奉りける。

青柳の色のいとにや結びてし。うれへはどけで春ぞくれぬる。

とぞき、侍りし。よればほどけでどかけるもあり。いづれか誠にて侍らん。

むかしの御つぼね紫式部の親にておはせし越後守爲時の、縣召に淡路になりて、いとからく  
おぼして、女房につけて、奏し給ひけるふみに、「昔學の寒夜に、紅涙襟をうるほし、  
除目の春朝、蒼天まなこにあり。」と書き給へりけるを、一條のみかど御覽して、夜の  
御殿に入らせ給ひて、ひきかづきて臥させ給ひけるを、御堂殿まねらせ給ひて、  
いかにかくはと問はせ給ひければ、女房の、爲時が奉りて侍りつるふみを御覽  
して御どのごもらせ給へる由、申されければいとふびんなる事かなとて、國盛と  
いひしを召して、越前になしたびたるを返し奉る由のふみかきて、たてまつれ  
とて、爲時を越前になさせ給へりしにぞ、みかどの御心ゆかせ給ひて、こまうど、  
ふみ作りかはさせんと、たほしめしつる御けしきありけるに合はせて、こしに  
下りて、から人とふみつくりかはされける。

去、國三年孤館、月

歸程萬里片帆、風

畫鼓雷奔、天不雨

綵旗雲聳、地生風

などぞきこえ侍りし。

(七六) まことこの道

大内記のひじりは、やんごとなき博士にて、文作る道類ひ少くて、よにつかへ  
 けれど、心はひとへに、佛の道に深くそみて、あはれびの心のみありければ、大内記  
 にて、記すべきとありて、催されて、内に参れりけるに、左衛門の陣などの方いや  
 女の泣きて立てるがありけるを、「何事あれば、かくは泣くぞ。」と問ひければ、  
 「あるじ女の使にて、石の帯を人に借りて、もてまかりつるが、道に落として侍れば、  
 あるじにも、重く戒められんすらむ。さばかりのものを失ひつる、あさましく悲し  
 くて、歸る空もなければ、思ひやる方もなくて、それを泣き侍るなり。」と申しければ、  
 心のうち推し量るに、誠にさぞ悲しからんとて、わがさしたる帯をときて、取らせ  
 たりければ、元の帯にはあらねども、空しく失ひて、申すかたなからんよりも、おの  
 づから罪もよろしくや侍る。とて、これをもてまからんずる嬉しさど、手をすりて、  
 とりてまかりにけり。さて片隅に帯もなく、隠れおたりける程に、事始まりけ  
 れば、おそしくと催されて、みくらの小舎人とかに、帯を借りてぞ、公事は勤めら

此の段は佛道に入  
りし人の物語をあ  
つめたり

れ侍りける。池亭の記とてかゝれたるふみにも、身は朝にありて、心は隠にあり  
 とぞ侍るなる、中務具平の宮の、もの習ひ給ひけるにも、ふみすこし教へたてまつり  
 ては、目を閉ちて、佛をねんじ奉りてぞ、怠らず勸め給ひける。かくて年をわたり  
 ける程に、年たけてぞ、かしらおろして、横河川のぼりて、法文ならひ給ひけるに、  
 増賀ひじりの、まだよがはに住み給ひけるほどにて、止觀の明靜なること、前代に  
 いまだ聞かず。とよみ給ひける、この入道、たゞ泣きになきければ、ひじり詞「かくやは  
 いつしか泣くべき」とて、こぶしを握りて、打ち給ひければ、我れも人も、事にがり  
 て、立ちにけり。又程經て、「さてもやは侍るべき。かのふみ受け奉り侍らん。と申し  
 ければ、又さきの如くに泣きければ、またはしたなく、さいなみければ、後のことば  
 もえ聞かで過ぐるほどに、又懲りすまに、御けしきとり給ひければ、又さらによみ  
 給ふにも、同じやうにいとゞ泣きをりければこそ、ひじりも涙こぼして、誠に深き  
 御法の尊くおぼゆるにこそとて、あはれがりて、そのふみ靜に授けたまひけり。  
 さてやんごとなく侍りければ、御堂の入道殿も、御戒など受けさせ給ひて、ひじり  
 みまかりにける時は、御諷誦などせさせ給ひて、さらし布も、むら給ひける、うけ



ぶみは、三河のひじりたてまつりて、秀句などかきとゞめ給ひけり。

昔隋煬帝ノ智者ニ報ゼシ、千僧ヒトツチアマシ、今左丞相ノ寂公トアラフ、  
サラシ布モ、チニミテリ。

とぞかゝればべりける。その三河のひじりも、博士にればして、大江の氏の、かんだちめの子に、おはしけるが、三河のかみになりて、國へ下り給ひけるに、類ひなくおぼえける女を、具しておはしける程に、女みまかりにければ、悲しびのあまりにとりすつることもせで、なりまかるさまを見て、心をおこして、やがてかしられろ去て、都にのぼりて、物など乞ひありきけるに、もとの妻にありける、女、我れを捨てたりし報いに、かゝれどこを思ひしに、かく見なしたると、など申しければ、御とくに佛になりなん事とて、手をすりて喜びけると、傳へ語り侍る。さて内記のひじりを師にし給ひて、ひんがし山の、如意寺におはし、横河にのぼりても、源信僧都などに、深き御法の心汲みしり給ひて、惟仲の平中納言の、北白川にて六十卷講じ給ひけるには、覺運僧都、まだ内供におはしける時、講師せさせ給へり。この三河の入道は、讀師とかやにてこそは、法華經の心説きあらはせるぶみも、點じ

去たゝめて、そこばくの聽衆ども居なみて、おのゝよみしたゝめられ侍りけり。かくて後にぞ、山三井寺の僧たちも、やすらかによみ傳へたまふなる。遂にから國におはしても、いひしらぬことどもおはしければ、大師の御名得給ひて、圓通大師どこそきこえ給ふめれ。かくれ給ひけるに、佛むかへ給ひ、樂のおと聞こえければ、それにも詩つくり、歌よみなどし給ひけるも、もろこしより送り侍りける。

笙謠ハルカニ聞コユ孤雲ノウヘ、聖衆來迎ス落日ノマヘ、  
とつくり給へり。歌は、

雲の上にはるか樂の音すなり。人やきくらんひか聞かもし、  
とよみたまへりけると聞こえ侍りし。

又少納言統理と聞こえし人、年ごろも世をそむく心やありけむ。月の隈なく侍りけるに、心をすまして、山深くたづね入らん心さしの、せちに催しければ、まづ家に、ゆする設けよ。出でん。といひて、かしら洗ひて、梳りほしなどしけるを、めなりける女も心得て、さめぐと泣きをりけれど、かたみに、とかくいふとはなくて、あくる日うるはしき装ひして、一の人の御もとに詣で、山里にまかりこもるべき由の、

いとま申しけれど、人も申しつがざりけるを、志ひ申しければ聞き給ひて、少納言  
こなたへとて、出あひ給ひて、御數珠たびて、「後の世は頼むぞ。」など侍りければ、  
數珠をばをさめて、拜したてまつりて、増賀ひじりの室にいたりて、かしられるし  
たりけれど、勤め行ふともなくて、もの思ひたる姿なりければ、ひじりさる心にて、  
はしたなく侍りければ、「生み侍るべき月にあたりたる女の侍ることの、思ひ捨て  
侍れど、いぶせく思ひたまへて。」などいふを、ひじり都にいそぎ出で、その家に  
おはしたりければ、え生みやらで、なやみけるを、ひじり祈り給ひて、生まれなど  
して、人にまめなるものなどこひ給ひて車につみて、うぶやしなひまでし給ひ  
けり。その統理に三條院より、歌の御かへし給はりける、

この歌は、  
あり大のい

忘られず思ひ出でつゝやま人を、志か戀しくぞわれもながむる。

と侍りけるに、涙のこひはべりければ、「東宮聖嗣より、歌たまはりたらんは、佛にやは  
なるべき。」とひじり耻ぢしめ給ひけるとかや。たてまつりたる歌も、あはれにきこ  
え侍りき。

きみに人なれな、らひそ。奥山に、いりての後もわびしかりける。

とぞよみてたてまつりける。

公經とか聞こえし手かき、ことよろしき國の司になりたらば、寺なども作らんと  
思ひしを、河内といふ、あやしき國になりたれば、かひなし。ふる寺などをこそは、  
修理せめ。と思ひて、見ありきけるに、あるふる寺の、佛の座の下に、ふみの見えけ  
るを披きて見ければ、沙門公經と書きたるふみに、こん世にこの國の司になりて、  
この寺修理せんといふ願たてたるふみ見てぞ、然るべき契りなりける。といひけ  
る。かきたる文字のさまなども、似たる手になんありける。ふしみの修理後細のかみの  
やうに、おなじ昔の名をつけるなるべし。

大外記定俊といひしが、越中守になりて侍りけるに、國のものは、思ふさまに侍り  
けれども、國の人のないがまろに思へるを、あやしみ思ひて、寐たりける夜の夢に、  
むかし此の國に、めくらきひじりの、持經者にて有りけるが、生まれて、かくはなり  
たるぞ。人のあなづらはしく思へるは、昔のなごりなるべし。そのひじり、さきの世  
に彼の國の牛なりける時、法華經一部を負ひて、山寺にのぼりたりしゆゑに、持經  
者になれりしが、此の度は國のかみとなりて、色の黒きもそのなごり、とぞ見たり

此の段は實名匠  
の事どもをかりり

樂座の字當時の語  
にてはきやうよう  
といへりしなり

ける。昔のなむりにや。末には法師になりて、江文のかたにこもりおて、行ひける  
とぞ、聞てえ侍りし。その子にて、信俊ときこえしも、身は世に仕へながら、佛の  
道のみ營みて、老いの後には、かしらおろしなどして、限りの時にのぞみては、  
みづから肥後入道往生したり。と云ひあはんすらむなど申して、尊くてうせに  
けるに、かうばしき匂ひありけるなど、きこえ侍りき。

(七七) かしこきみちく

常陸介實宗と聞てえし人、くすしに尋ねべきとありて、雅忠が許にゆけりけるに、  
志ばしとて、障子のつらに据ゑたりけるに、まらうど響應しけるあひだに、門より  
入りくる病ひ人を、かねて顔けしきを見て、是れはその病ひを問ひに來る者なり。  
といひて、たづねれば誠よ志かありけり。其のなかに、見苦しきこともあり。をかし  
きこともありて、えいひやらねば、皆心えたりなどいひて、つくろふべきやうなど  
いひつゝ、あへたらへやりけるに、まらうどは、有行なりけり。家あるし盃とりたる  
を、有行云とく其のみきめせ。只今ゆゝしきなおの振らんずれば、うちこぼしてんす。と  
いふに、さしもやは。とや思ひけん。いそがぬ程に、なのおびたしく振りて、はたと

ひとしき酒を、うちこぼしてけり。あさましき事ども聞きたりとぞ、語りける。

中頃笙の笛の師にて、市佑時光と聞てえしが、いづれの御時にか。内より召しけ  
るに同じやうに老いたる者と、ふたり基うちて、歌うたふ様によりあはせて、おほ  
かた聞きもいれず、御返りも申さざりければ、御使あざけりて、歸り参りて、かく  
なん侍る。どうれへ申しければ、いましめはなくて、仰せられけるは、いとあはれな  
る事かな。唱歌しすまして、よろづ忘れたるにこそあんなれ。みかどの位こそ、くち  
をしけれ、さるめでたきことを、往きてもえ聞かぬ。とぞのたまはせける。用光と  
いひし筆築の師と、ふたり鬘頭樂をさう歌にしけるとぞ、後にきこえける。その用  
光が、相撲の使に西の國へ下りけるに、きびの國のほどにてや。沖つ白波たちきて、  
こゝにて、命も絶えぬべく見えければ、かりきぬ、かぶり、うるはしくして、屋形  
のうへに出で、をりけるに、白波の舟こぎよせければ、その時用光筆築とり出だ  
して、うらみたる聲に、えならず吹きすましたりければ、白波ども、おのゝ悲しび  
の心れこりて、かづけものをさへして、漕きはなれて去りにけりとなん。さほどの  
ことわりもなきものゝふさへ、なさけかくばかり吹き聞かせけんもあり難く、

又昔の白波は、なほかゝるなさけなんありける。

いとやさしく聞こえ侍りしことは、いづれの御時にか侍りけん。中頃のきさき上東門院、陽明門院などにやれはしけん。近き世の帝の御時、珍らしく内にいらせ給へりける時、月のあかく侍りける夜、むかしはかやうに侍る夜は、殿上人あそびなどこそ内わたりは志はべりしか。さやうなることも侍らぬこそ、くちをし、」など申させ給ひければ、いと耻づかしくればしめしける程に、月の夜めでたきに、「凜々として氷しき」といふうた、いと花やかなる聲して、謠ひけるが、なべてなく聞こえけるに、又いといたくまみたる聲のたふときにて、無量義經の、微滯まづおちて、などいふところを打ちいで、よまれ侍りけるが、いづれもくどりぐに、めでたく聞こえければ、昔もかばかりのことこそ、えき、侍らざりしか。いと優なるものどもこそ侍りけれ。と申させ給ひけるにこそ、御汗もかわかせ給ひて、御心もひろごらせたまひにけれ。とき、侍りし。後冷泉院の御時、上東門院などいらせ給へりけるにや。又その人々は伊家の辨、敦家の中將などにやおはしけんぞぞ、人は申し侍りし。ひがことにてや。

又能因法師、月あかく侍みける夜、いたおにむかひて、叱のふき板、所々どりのけさせて、月やどして見侍りけるに、門たゝく音し侍りければ、女ごゑにて、とひ侍りけるに、うちより勅使のわたらせ給へるなりと、馬部といふ者の申しければ、門開きていづみのもとに、御使の藏人入れ侍りけるに、「仰せごとになん。月のうたのすぐれたるは、いづれかある。」と仰せはべりつれば、俄に馬つかさの御馬めして、急き對面するよしなど、誰れにか有りけん。その時の藏人の申し侍りければ、  
月よ、しよ、しよ、しよ、人につげやらば、こてふに似たりまたずしもあらず。  
といふうたをなむ申しけるが、同じ御ときのことにて侍りけん。たしかにもき、侍らざりき。

月夜よしの歌古今  
體四によみ人しら  
ずとあり

此の段は歌よみたる事の物語を集めかけり

この歌拾遺集にあり

◎第十

(七八) 敷島のうちぎ

中頃男ありけり。女を思ひて、ときく通ひけるに、をどこある所にて、ともし火のほのほの上に、かの女の見えければ、これは思むなるものを、火のもゆる所を、かき落としてこそ、その人に飲ますなれ。とて、紙みにつゝみて、もたけけるほどに、事繁くして、まぎるゝことありければ、わすれて、一日二日過ぎて、思ひ出でけるまゝに、ゆけりければ、悩みて、程なく女かくれぬ。といひければ、いつしか往きて、かのともしびの、かきおとしたりし物を見せでと、わが過ちに悲しくおぼえて、つねなき鬼に一口にくはれけむ心うさ、足すりをしつべく、歎き泣きけるほどに、御覽せさせよとにや。この御ふみを見つけて侍るとて、とり出だしたるを見れば、

鳥部山たに、けぶりの見えたらば、はかなく消えし我れと志らなん。

とぞかきたりける。歌さへともし火のけぶりとおぼえて、いと悲しく思ひける、ことわりになむ。

又ある女有りけり。ときぐ通ひける男の、いつしか絶えにければ、心うくて、心のうちに、思ひ悩みける程に、その人門を過ぐるとのありけるを、家の人の「今こそ過ぎさせ給へ。」といひければ、思ひあまりて「きと立ちながらいらせ給へ。」と逐ひつきて、云はせければ、やりかへして入りたるに、もと見しよりも、なつかしきさまにて、殊の外に見えければ、悔しくなりて、とかくいひけれど、女たゞ經をのみよみて、かへりごともせざりける程に、七のまきの、即往安樂世界、といふ所を、くりかへしよむと見ける程に、やかて絶えいりて、うせにければ、我れもよりてれさへ、人もよりて、とかく去けれども、やがてうせにけり。かくて籠もりもし、又かしらをも、おろしてむと、思ひけれど、當時辨師賢なりける人なれば、さすがえ籠らで、土にれりて、とかくの事までさだして、去はしは山ざとに、かくれたりければ、世ををむきぬると、聞こえけれど、さすが、かくれもはて、出でつかへければ、かへる辨となんいひける。

左衛門尉頼實といふ藏人、歌の道すぐれても、又好みにも、好み侍りけるに、七條なる所にて、夕に郭公をきく。といふ題をよみ侍りけるに、酔ひて、その家の車宿り

にたてたる車にて、歌案せんとて、寐過ぐして侍りけるを、もとめけれど、思ひよらで既に講せんとて、人皆かきたる後にて、此のわたりは、稻荷の明神こそとて、念じければ、きとばえけるを、かきて侍りける。

いなり山こえてやきつる。郭公、ゆふかけてしも聲の聞こゆる。

同じ人の、人にまらるばかりの歌、よませさせ給へ。五年か命にかへん、と住吉に、申したりければ、落葉雨の如し。と云ふ題に、

木の葉ちる宿は聞きわくとぞなき。時雨する夜も去ぐれせぬよも、

とよみて侍りけるを、かならずこれども、思ひよらざりけるにや。病ひのつきて、生かんと祈りなど去ければ、家に侍りける女に、住吉のつきて、「さる歌よませしは、さればえ生くまじ。」とのたまひけるにぞ、ひとへに、後の世の祈りになりけるとなん。

又同じゆかりに、三河守頼綱といひしは、まだ若くて、親のともに、三河國に下りけるに、かのくくの女をよばひて、又も音づれざりければ、女、

あさましや見しは夢かと問ふほどに、おどろかぞよもなりけるかな。

と申しければ更におぼえつきてなん思ひ侍りける。かくよむども、みめかたちやは變るべき。とおぼえ侍れど、むかしの人、中ごろまでは、人のこゝろ、かくぞ侍りける。此の事は、その人の子の、仲正といひしが、語り侍るとなむ。

三河守頼綱は、歌のみちにとりて、人もゆるせりけり。わが身よも、殊の外に、思ひあがりたるけしきなりけり。俊頼といふ人の、少將なりける時、頼綱が云ひけるは、「少將殿く、歌よまむとればしめさば、頼綱を供せさせ給へ。べちの者も、まかりいるまじ。あらひたる佛供なん。ふたかはらけ、そなへさせ給へ。」などぞいひける。其の歌、たほく侍れども、

夏山のならのはそよぐ夕暮は、ことしも秋の心ちこそすれ。

といふ歌ぞ、人のくちすさびにし侍るめる。

近き世に、女ありけるを、八幡なる所に宮寺のつかさなる、僧都光清ときこえし、小侍従とかいふ親にやあらん。その坊にこめすゑて、程經けるほどに、都より、然るべき人のむすめを、わたさんといひければ、信都「かゝるとのあるに、人の聞く所も、憚らはしければ、まはし都へかへりて、むかへん折こ」とて、またてゝ出だしけるが、あまり

この歌も後述集にあり

こちたく、贈り物などしてぐしければ、今はかくてやみぬべき、わぎなめりと、思ひけるにつけても、いと心ぼそくて硯がめのしたに、歌をかきておくりけるを、どりで、見ければ、

行く方もまらぬうき木の身なれども、よにしめくらは流れあへかめ。

となむ、よめりけるを見て、むすめなりける人は、院鳥羽のみや道重くなど、うみ奉りたるが、まだ若くおはしけるに、京へ送りつる人、この歌をよみおきたる、返事をやすべき。又迎へやすべき。と申しあはせければ、かへしは、よのつねのとたり。迎へ給へらんこそ、歌のほいも侍らめ。と聞こえければ、心にやかなひけん。その日のうちに、迎へに更にやりて、「けふかならず、かへらせ給へ。」とて、あけゆく程に、かへりにけり。又その然るべき人のむすめを、いひしらす、おどころなど志つらひ、はしたもの、雑仕などいふもの、數あまた、またてゝすゑたりけれど、一夜ばかりにて、硯がめの人へのみ、離るゝともなくぞありける。その女も、大臣家の宮仕へ人なりけるが、母の筑紫に下りて、菅原の氏寺の別當に具したりけるが、法師みまかりにければ、都へのぼるべきやすがもなくてをりけるを、そのむすめは、朝夕に、これを

歎きけるほどに、大臣殿、五節たてまつり給ひけるにや。わらはにいたすべき女  
外のかたぐ、見給ひけれど、これはかりなる、見えざりければ「思ふやう有りて  
いふぞ。いはんと聞きてんや。」とありければ。「いかでか仰せごに、志たがはず  
侍らん。」と申しけるに、「五節大臣のわらはに出ださんと思ふ。」とのたまひければ、「いか  
なるとも、うけ給はり候ふべきを。それはえなん侍るまじき。」と申しければ、あな  
がちに思ふとにてあるに、構へて聞きたらば、いかなる大事をも叶へんとあり  
ければ、かくまでのたまはせんと、そのみもえいなび申さで出でたりけるに、かの  
大臣殿のわらは、いかばかりなるらんとて、殿上人われもくど、ゆかしがりあへ  
りける中よ、さかりに物などいひける何の少将などいひける人も、見んなどしけ  
るを、ある殿上人の「珍しげなし。いつも御覽せよ。」と云ひければ、怪しと思ひて  
見るに、わがえさらず物いふ人なりければ、恨み耻ぢしめけれど、さほど思ひたち  
て出でにけり。のちに、大臣殿、「此の喜びにいかなる大事かある。」と問ひ給ひけれ  
ば、「熊野女にまうでんの志を深く侍る。」と申すに、やすき事とて夫さをれなごあまた  
召して、清きころも何かと出だしたてさせ給ひて、参りて筑紫の母迎へよせん

とを心ざし申してかへるに、淀のわたりにや。みゆきなどの、よそひのやうに、道も  
えさりあへぬとのありけるが、けふ政所の、京に出でたまふといひて、よろには、  
ものとも思はぬとの、いひしらす見えける程に、むしたれたる、はざまよりや見え  
けん。ふみをかきて、京より御ふみとてあるを見れば、大臣殿の御使にはあらで、  
思ひがけぬ筋の文なりけり。ありつる石清水の僧の舟の人など、見しりたるとも  
人といひければ、きゝも入れぬ程に、かたぐ思ひかけず、いはせければ、いなびも  
はて下りて、かの筑紫の母、むかへとりて、都に志すゑなどしたりけるとなむき  
こえしは、小大進とかいふ人の事にやあらん。

陸奥守橋爲仲と申す、かの國にまかり下りて、五月四日、館に廳官とかいふ者、年老  
いたる出できて、あやめふかするを見ければ、例の菖蒲にはあらぬ草を、葺きける  
を見て、「けふ爲仲はあやめをころ葺く日にてあるに、是れはいかなるものを葺くぞ。」  
と問はせければ、「傳老人へうけ給はるは、この國には、むかし五月とて、あやめふく  
事も、知り侍らざりけるに、中將實方のみたちの御時、「けふ中將は菖蒲ふくものを、いかに  
さるともなきにか。」とのたまはせければ、「國の例にさると侍らず。と申しけるを、



「さみだれのころなど軒のまづくも、あやめによりてこそ、今少し見るにも聞くにも、心すむとなれば、はや昔け。」とのたまひけれど、この國には、おひ侍らぬなりと申しければ、「さりとて、いかゞ日かなくてはあらん。あさかの沼の、はなかつみといふもの有り。それを昔け。」とのたまひけるより、こも申すものをなんふき侍る。とぞ、むさしの入道隆資と申すは、語り侍りける。もし然らば、「ひく手もたゆく長きね、といふ歌、おぼつかなく侍り。實方中將の御墓は、みちのおくにぞ侍るなる。と傳へき、侍りし、誠にや。藏人頭にも、成り給はで、みちのおくの守に成り給ひてかくれたまひにしかば、この世までも、殿上のつきめの臺盤たいばんすゑたるをは、雀ののぼりて、くふをりなどぞ侍るなる。實方の中將の、頭になり給はぬ、おもひの遣りておはするなど申すも、誠にはべらば、あはれに耻づかしくも、末の世の人は侍る事かな。

いづれの年にか侍りけん。右近の馬場の、ひをりの日にやありけん。女車、物見にやりもてゆきけるに、重通の大納言、宰相中將に、おはしける時にや、車やりつゞけて、見知りたる車なれば、見よき所にたてさせなどして、後に、わが隨身を、女の

車にやりて、

たれくぞたれぞさやまのほどゝぎす、

とかや聞こえければ、女の車より、

うはのそらにはいかゞなのらん。

とぞいひ返しける。いとすぐれてきてゆるともなく、かなはずもやあらん。されども、事がらのやさしく聞こえしなり。時の程に覺えんともかたくて、さてやまむよりも、かやうに云ひたるも、さる事ときこゆ。又連歌のいつ文字も、げにと聞こえぬども、さやうに問ふべきとに、侍りけるなるべし。又確にも、えうけ給はらざりき。ひをりといふとは、おぼつかなきとに侍るとかや。兼方は眞手番まてばんと申し侍りけるとかや。匡房中納言の、江次第とかやにも、このとは見え侍るとぞきゝ侍りし。又いづれの年にか。眞弓の的かくるとを、舍人の争ひて、日くれ夜ふくるまで侍りければ、物見車ども、おひくゝに、歸りけるに、かきつけて、大將の隨身に、とらせたりけるとかや。

梓弓ためらふほどよ月かげの、いるをのみ見て歸りぬるかな。

ひがことじや侍りけん。いづもの國にて、うせ給ひにし大將殿の、つき給へりじとかや。

堀河のみかどの内侍にて、周防とかいひし人の、家をはなちて、外にわたるとて、はしにかきつけたりける、

この歌金葉集にもあり

すみわびてわれさへのきの忍草、志のぶかたぐゝまげき宿かな。

とかきたる、まだその家は、のこりて、その歌も侍るなり。見たる人の語り侍りしは、いどあはれにゆかしく、その家は、かみわたりに、いづことかや。冷泉堀河の西と北とのすみなるところとぞ人は申し。おはしまして御覽すべきぞかし。またうせぬ折に、又堀河のみかどの、うせたまひて、今のみかどの、内侍にわたるべき由侍りけるに、

これは後拾遺集にもあり

あまのがは同じ流れといひながら、わたらむとは猶ぞ悲しき。

とよまれて侍りけん。いとなさけ多くこそ、きこえ侍りしか。

近くはせし。横河の座主の坊に、琳賢といひて、心たくみにて、石たて、かざり車の風流などするものはべりき。うたへ申すことありて、藏人頭にて、雅兼中納言

のおはしける時、かの家にいたり侍りけるに、大原のたきの歌こそ、いとをかしく聞こえしか。と侍りけるに、うれへ申すとはいかでも侍りなん。この仰せころ、身にまみて、嬉しく侍れ。とてなん限りなく、よろこびて出でにける。その歌は、花園のおどりの、大原の房の、瀧見にいたりたまへりけるに、

今よりはかけておろかにいししみづ、御覽をへつるたきの白糸、

とよめりけるとぞ。たはぶれごとのやうなれども、ことさまの、をかしく聞こえ侍れば、申し侍るになん。つのかみ範永といひし人は、何れの山里にか、夕ぐれに、庭におりて、とゆきかうゆき、志あるきて、「あはれなるかなく。」とたびくながめければ、帯刀節信といひしが、「日くるれば、とところぐの鐘の聲」と付けたりければ、あなふわいとなんいひける。そのかみ井手のかはづをとりて、飼ひける程に、そのかはづ、身まかりにければ、ほしてもたりけるとかや。

いづれの齋の宮とか。人の参りて、今様歌ひなど、せられけるに、未つ方に四句の神歌うたふとて、「うゑきをせしやうは、鶯すませんともあらず。」と歌はれければ、心とき人など聞きて、はかりあることなどや、出でこんとおもひけるほどに、

かうなるはかうな  
體に照るべきし  
體に照るべきし  
おけり

「くつ／＼かうなるなめすゑて、染紙よませんとなりけり。」とぞ、うたはれたりけるが、いとその人うたよみなどには聞こえざりけれども、えつるみちになりぬれば、かくぞ侍りける。この事刑部卿とか。人の語られ侍りしに、侍従大納言と、申す人も侍りしが、さらばことわりなるへし。

菩提樹院といふ寺に、ある僧房の、池のはちすに、鳥の子をうみたりけるをとりて、籠にいれて、飼ひけるほどに、うぐひすの籠より入りて、ものく／＼めなどしければ、うぐひすの子なりけりと、知りにつれど、子はれほきて親にも似ざりければ、怪しく思ひけるほどに、子のやう／＼おとなしくなりて、ほど／＼きすと、鳴きければ、むかしより、云ひ傳へたるふるきと、誠なりと思ひて、ある人よめる、

親のおやぞいまはゆかしき。郭公、はや鶯のこは子なりけり。

とよめりける。萬葉集の長歌に鶯のかひこの中のほど／＼きす、などいひて、このとに侍るなるを、いと興あるとにも侍るなるかな。藏人實兼ときこはし人の、匡房の中納言の物語にかけける文にも、中ごろの、人この事見あらはしたるとなど、かきて侍るとかや。かやうにこそ、傳へ聞くとにて侍るを、まちかく、かゝる事にて侍らん

此の段は萬葉集  
の疑ひをかり

こそ、いとやさしく侍るなれ。右京權大夫賴政といひて、歌よめる人の、さることありと聞きて、わざとたづねきて、その鳥の籠よ、結びつけられ侍りけるうた、

鶯の子になりにける時鳥、いづれのねにかなかんとすらん。

萬葉集には、父に似てもなかず。母に、てもなかず。と侍るなれば、うぐひすとは、なかずや有りけん。など、いとやさしくこそ申すめりしか。

(七九) 奈良の御代

此の中の人の、おぼつかなき事、ついでに申さん。とて、聽人間萬葉集は、いづれの御時につくられ侍りけるぞ。と問ひしかば、答古今に、

神無月志ぐれふりおけるならの葉の、なにおふ宮のふるとうこれ、

といふ歌侍り。といひし、人又問古今序に、「かのれほん時、おほきみつの位、柿本の人丸なむ、歌のひじりなりける。」とあるに、かの人丸は、かの御時よりも、昔の歌よみと見ゆるを、萬葉集つくれる時より、古今えらばれたる時まで、年はも／＼とせあまり、世は十つきとあれば、とづきといはゞ、大同の御代と聞こえたるに、百とせ餘りといふは、さきの事ときこゆる上に、人丸はあがりたる世の人と見えれば、えなむ

あるまじき。いかゞと問へば、「誠マコトに、おぼつかなきことを、かくこまかに尋ねさせ給ふこそ、いと心にくく、とて、ならのみかど、申さんこと、大同の御世のみにもあらずや侍らん。元明天皇奈良の都に、和銅三年の春のころ、始めて遷らせ給ひけるに、長屋の原に御こしとゞめて、藤原のふるさとを顧み給ひて、

とぶ鳥のあすかの里をおきていなば、君があたりは見はせかもあるらん。

とよませ給へり。はしの目録にも、寧樂の御歌とて、かきつらねて侍るめり。寧樂はならのといひ名つくるなるべし。かくて後七八代は、奈良の都にぞ、おはしましける。その御世どもにも侍らん。ならのみかど、申す御名は、三代おはしますかと申す人もありとぞ聞き侍りし。柏原のみかどの御時、長岡の京にわたり給ひて、十年ばかりありて、この平ヘイの京には、遷らせ給ひて、その御子の、大同のみかども、この京の後なれども、平城ヘイとは、わたりたまひてのち、べちの御名なるべし。萬葉集に、人丸が歌どもの入りたるど聞き侍りしにも、柿カキ本人丸集にいでたり。などいひて、其の世の人とは、きこえずなん侍るうちに、奈良の京のさきよりも、人丸が歌は、多く見え侍るめり。淨見原キヨミハラのみかどの、吉野の宮に、みゆきしたまひけるにも、

よめる歌侍るめり。輕の皇太子、安騎野に宿り給ふ時の歌とても侍るめり。文武の御事なるべし。又人丸が讀とて、いづれの博士か。作られたるには、「持統文武の聖朝につかへ、新田高市の皇子にあへり。」となむ侍るめる。かくて奈良の御世までありて、聖武の御時などにも、あひ奉りけるにやあらん。と申す人あるべし。誠に奈良の都の時には、ありけん、とおぼえ侍るとは、そのかみ人丸といふ集、所々き、侍りしに、天平勝寶五年の春三月、左大臣橋ハシ卿ノリノの家に、諸卿大夫たち宴し給ひけるに、あるじのおとゞ、問ひてのたまはく、古歌にも、

あさもよひきの關守がたつか弓、ゆるす時なくまつゑめるきみ。

といふ歌のはじめ、いかゞと侍りければ、式部卿石川卿こたへ給へることなど侍るは、高野タカノ姫ノのみかどの御時にこそ侍るなれ。そのほどまで、としたり侍れども、大同の御時までは、いかゞはさのみも侍らん。」といふに、古今序イノチノに、「いにしへよりかく傳はるうちに、ならの御時よりぞ、ひろまりける。かの御世や、歌の心を、まろしめしたりけん。かの御時、人丸なん、ひじりなりける。かゝりけるさきの歌を、あはせてなん、萬葉集となづけられたりける。」とかけるは、人丸が世にえらばれ

たるやうにこそ、聞こゆれ。といへば、誠云「誠に心え難きとに侍る、そのあひだに、詞多く侍る上に、れしはかり思ひたまふるに、貫之ひがとを、かくべきにもあらず。たどひあやまちたりども、延喜みかどの御覽じとがめずやは侍らん。志かあれば、古今の詞につきて、なすらへ試みるに、ならの御時よりひろまりたると侍る、赤人人丸が、あひ奉れる御世と聞こえたり。この人々をおきて、又すぐれたる人々も、吳竹のよゝに聞こえ、かた糸のよりくゝに絶えずなんありける。さきの歌をあはせてなん、萬葉集となづけられたりける。といふは、赤人、人丸が、のちの世々に、よめる歌どもをあはせて、大同の御代には、作られたりともや心得べからん。ならの帝といふは、同名におはしませば、ひとつことなるやうなれども、萬葉集の時には、人丸がよのあはねば、ひとつ世にはあらざるべし。

此の歌古今集にも  
ありぬ

龍田川紅葉みだれて流るゆり。わたらば錦中や絶えなん。  
とよませ給へるは、人丸があひ奉れる御代の、御歌なるべきにやあらん。古今序に、たつた川にながるゝ紅葉は、帝の御目には、錦と見え、吉野山の櫻は、人丸か目には、雲かどぞればえける。とあれば、後のみかどの御製とは、聞こえざんべし。

ふるさと、成りにしならの都にも、色はかはらず花ぞ咲きける。

とよませ侍りけるは、大同の御製なるべし。昔の奈良のみかどならば、ふんさと、よませ給ふべからず。この御歌は、ならのみかどの御歌とて、古今の春下<sup>下</sup>に、入れたてまつれり。もみちの錦の御歌は、秋下<sup>下</sup>に、よみ人志らす。ある人ならのみかどの御歌なりとなん侍るも、少しのかはる志るし、なきにもあらず。志かあるのみにあらず。もし同じみかど、申すは、ればつかなき所多く、もしあらぬ御時ならば、同じ御名にて、まがはせ給ひぬべき上に、目録どもにも、

萩の露玉にぬかんと、れはけぬ。よし見む人は枝ながら見よ。

といふ御歌も、よみ人志らす。ある人、ならのみかどの御歌なり。といふを加へて、三首おなじ御時なるやうに見ゆるは、目録のあやまれるにやあらん。おぼつかなき事、能く思ひ定めつべからん人に、尋ね申させ給ふべき事なるべし。といふに、聴人ノ詞「それは忽に、定めえがたく侍る也。又このついでに、尋ね申さんどて、萬葉集は、億良が撰べる。といふ人あるは、志か侍りけるにや。と問へば、誠云「いかでか。さやうのことばは、その時の人にも侍らす。その道にもあらぬ身は、こまかにき<sup>き</sup>とむ<sup>む</sup>べき

にも侍らず。志かは侍れど、億良が類聚歌林などには、遙かなる人とみえてこそ、萬葉にはひきのせ侍るなれ。天平五年歌にも、筑前守億良などいひて侍るなるは遙かに先の人こそ侍るなれ。大同にはあらずや侍りけんなど申しめりしか。

此の段は式部  
事より源氏物語の  
評に及び日くれて  
物語をばる

(八十) 作り物語のゆくへ

又ありし人の「誠詞にや。むかし式部の人の作り給へる、源氏の物語に、さのみかたもなきことのなよび艶なるを、もしほ草かきあつめ給へるによりて、後の世のけぶりとのみ、消えたまふこそ、えんにえならぬつまなれども、あちきなく、とぶらひ聞こえまほしく、詞などいへば、返事には「誠詞に世の中には、かくのみ申し侍れど、理り知りたる人の侍りしは、やまとにも、もろこしにも、ふみつくり、人の心をゆるかし、暗き心を導くは、常のとなり。俊語などいふべきにはあらず。わが身になきとをあり顔に、げにくといひて、人にわろきみを、よしと思はせなどするこそ、そらごとなどはいひて、罪うるとにてはあれ。これはあらまじとなどや、いふべからん。綺語とも、雑穢語などはいふとも、さまで深き罪には、あらずやあらん。生きとしける者の命を失ひ、あるとしある人の、寶を奪ひとりなどする、深き罪あるも、

奈落の底に沈むらめども、いかなる報いありなど聞てゆるともなきに、これは却りて、怪しくもおぼゆべき事なるべし。人の心つけんことは、功德とこそなるべけれ。なさけをかけ、艶ならんによりては、輪廻のこふとはなるとも、奈落に沈む程のことやは侍らん。此の世のことだに、知りたくはべれど、もろこしに、白樂天と申したる人は、な、そちの、卷き物をつくりて、詞をいろへ、たどへをとりて人の心を進め給ふなどきこえ給ふも、文珠の化身とこそは申すめれ。佛も譬喩經などいひて、なきことを作り出だし給ひて、説きおき給へるは、虚妄ならずとこそは侍るなれ。女の御身にて、さばかりのことを、作り給へるは、たゞ人にはおはせぬやうもや侍らん。妙音觀音など申す、やんごとなき、ひじりたちの、女になり給ひて、法を説きてころ、人を導き給ふなれ。といへば、供に具したる、わらはの聞きていふやう、女になりて、導きたまふことは、淨徳夫人の、みかどを導きて、佛のみもとにすゝめなどし給ひ、勝鬘夫人の、親にふみかはして、佛をほめ奉りて、世の末までも、傳へなどし給ふこそ、普門の示現などもおぼえめ。これはをどこ女の、えんなるを、げにくとをかきあつめて、人の心に志めさせん、なさけをのみ

盡さんことは、いかゞは、たふときみのりとも思ふべき。」といへば、「誠まことに然はあれども、事さまの、なべてならぬ、めでたさの餘りに、思ひつゞけ侍れば、物語などいひて、ひと巻、ふた巻のふみにもあらず、六十帖などまで、作り給へるふみの、少しあだにかたほなるともなくて、今も昔も、めでもてあそび、みかどきさきよりはじめて、えならずかきもち給ひて、御寶物みたまものとし給ひなどするも、世にたぐひなく、また罪ふかくおはすると、世に申しあへるにつけても、なか／＼あやしく、おぼえてこそ申し侍れ。罪深きさまをも志めして、人に佛のみなをも、唱へさせ、どぶらひ聞てえん人の爲に、導き給ふはしとなりぬべく、なさけある心ばへを志らせて、うき世に沈つまんをも、よき道に、引きいれて、世のはかなき事を見せて、あじき道を出だして、佛の道にすゝむ方も、なかるべきにあらず。其の有様、思ひつゞけ侍るに、あるは別れをいたみて、優婆塞の戒をたもち、あるは女のいさぎよき道を守りて、いさめごとじ違はず、この世を過ぐしなどし給へるも、人の見ならふ心もあるべし。又みかどの覺えかぎりなくて、えならぬ宿世、おはすれども、夢まぼろしの如くにて、かくれ給へるなど、世のはかなきことを見ん人、思ひ去りぬべし。

又みかどの位をすてゝ、おどうとに譲り給ひて、西山の麓に、住み給ふなども、佛の道に入りたまふ、深きみのりにも、かよふ御有様なり。提婆品に説かれ給へる、昔のみかどの御有様も、思ひ出でられさせたまふ。ひとへに、をどこ女のことのみやは侍る。おほかたは、智恵をはなれては、闇にまどへる心をひるがへす道なし。惑ひの深きによりて、うき世の海のそこひなきには、たゞよふわざなりとぞ、世親菩薩のつくり給へる、文のはじめつ方にも、のたまはずなれば、ものゝ心を辨へ、悟りの道にむかひて、佛のみのりを廣むるたねとして、あらしきことばも、なよびたる詞も、第一義どかにも、かへしいれんは、佛の御志なるべし。かくは申せども、濁りにままぬ、法のみことならねば、露霜と、むすびれき給へる、ことこの葉もおほく侍らんのりのあさ日によせて、たれも／＼、なさけ多く、おはしまさむ人は、もてあそばせ給はんにつけても、心にまめて、おぼさむによりても、どぶらひ聞てえたまはんぞ、いとゞ深きちぎりなるべき。などいひつゞけ侍るに、行く末も忘れて、なほきかまほしく、なごり多く侍りしかども、日くれにしかば、たち別れ侍りにき。いかでか又あひ奉らんずる。來ん世にうゑきのもとに佛となりて、これがやうに法説きて、

人々に聞かせ奉らばや。など申しよこそ、たゞ人とも覺え侍らざりしか。その程と申しよところ、尋ねさせ侍りしかども、え又もあはでなん。人をつけて、たしかに見おかせでと、悔しくのみおぼえてこそ、すぎて侍れ。

定校  
今鏡讀本 下終

明治二十九年十月五日印刷  
明治二十九年十月八日發行



編纂者 關根正直  
東京市本郷區森川町一番地

發行者 渡邊兵吉  
東京市神田區表神保町貳番地

印刷者 久米川治三郎  
東京市京橋區宗十郎町拾七番地

印刷所 國文社  
東京市京橋區宗十郎町十五番地

發行所 東京市神田區表神保町貳番地  
六合館書店





終

